北山のあゆみ

八女市立花町北山

北山地区地域振興会議

八女市立花町北山

北山のあゆみ

発刊　北山地区地域振興会議

発刊にあたって

令和３年度八女市地域づくり提案事業として、北山の中で特に歴史遺産の多い「山下町」を対象に『故郷（山下町）の歴史の整理と冊子の編纂』を実施した。

この経験を踏まえ、令和５年度提案事業として『北山全体の郷土史編纂事業』を実施したものである。

北山には、多くの古墳群や神社・仏閣等の文化遺産等がある。また、明治以降大きな歴史の変革が起きている。これらを整理（デジタル化）し、冊子にすることにより、後世に残すことができ、また文化遺産や地域の成り立ち等への北山区民の再認識につながる。

冊子は北山全戸に配布する。

執筆にあたっては、次のテーマ毎に造詣の深い北山の有志の方々にお願いした。北山区民が、読み易くなる様にできだけ写真を多くしたつもりである。

①古墳　②飛形山大光寺　③山下城　④男ノ子焼
⑤千間土居　⑥神社仏閣　⑦明治以降の北山　他

発刊にあたっては、編集委員の皆様には、再三にわたり編集・校正の作業をお願いした。

最後に、快く監修を頂いた佐々木四十臣氏 ならびに八女市および関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

令和６年２月

北山地区郷土史編纂委員会事務局長

甲斐田照明

北山のあゆみ　目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・1

北山の古代・・・・・・・・・・・2

第1章　縄文時代の北山・・・・・・・・6
1　白木西原遺跡・・・・・・・・・・6
2　北山小学校遺跡・・・・・・・・・8
3　北山今小路遺跡・・・・・・・・・8
第2章　弥生時代の北山・・・・・・・・8
1　北山今小路遺跡・・・・・・・・・8
2　北山八竜遺跡・・・・・・・・・・11
3　幾野々原遺跡・・・・・・・・・・11
4　曲松遺跡・・・・・・・・・・・・11
第3章　古墳時代の北山・・・・・・・・12
1　古墳時代の住居跡等・・・・・・・12
2　古墳・横穴墓等・・・・・・・・・15
第4章　茶臼塚古墳　大塚古墳への道・・・21

飛形山大光寺・・・・・・・・・・・22

第1章　大光寺の歴史・・・・・・・・・22
第2章　火の玉伝説・・・・・・・・・・25
第3章　大光寺の行事・・・・・・・・・26
1　子の年の御開帳・・・・・・・・・26
2　初観音・・・・・・・・・・・・・27
3　盆供養と観音祭り・・・・・・・・27

山下城の歴史と城址の保護活動・・・・28

第1章　上蒲池氏の起こりから終焉まで・・・28
1　上蒲池氏（山下城主）の起こり・・・28
2　山下城をとりまく周辺の情勢・・・・28
3　筑後国守護職大友氏の支配・・・・・29
4　龍造寺氏の筑後侵攻・・・・・・・・30
5　島津氏の筑後・筑前侵攻・・・・・・32
6　豊臣秀吉の九州平定と新しい国割・・・33
7　上蒲池家（旧山下城主家）のその後・・33

第2章　笑月山智願寺の起こり・・・・・・・・34
1　『立花町史』より・・・・・・・・・・・・34
2　智願寺の由来・・・・・・・・・・・・・・34
第3章　本城　山下城・・・・・・・・・・・・36
1　山下城址の遠望・・・・・・・・・・・・・36
2　山下城の防御・・・・・・・・・・・・・・37
3　山下城址北側の樹木伐採後の様子・・・・41
4　ブルドーザーにより造成が一気に・・・・42
第4章　国見岳城・鞍懸城・・・・・・・・・42
1　国見岳城址の遠望・・・・・・・・・・・42
2　国見岳城の防御・・・・・・・・・・・・43
3　鞍懸城址・・・・・・・・・・・・・・・45
第5章　山下城址を守り愛する活動・・・・・46
1　山下城址石碑・・・・・・・・・・・・・46
2　山下城址説明板・案内板設置・・・・・・46
3　山下城址整備作業・・・・・・・・・・・48

男ノ子焼・・・・・・・・・・・・・・・・50
第1章　男ノ子焼の起源・・・・・・・・・・50
第2章　男ノ子焼の特徴とその終焉・・・・・51
第3章　男ノ子焼の再興（男ノ子焼の里）・・53
第4章　男ノ子焼の里保存会・・・・・・・・54
第5章　地名と周辺の史跡等・・・・・・・・56
1　男ノ子の地名・・・・・・・・・・・・・56
2　男ノ子不動の滝・・・・・・・・・・・・56
3　その他の史跡（玉垂神社・日清橋）・・57
4　荘厳院　（真言宗・仏師工房）・・・・58

千間土居・・・・・・・・・・・・・・・・60
第1章　矢部川・・・・・・・・・・・・・・60
第2章　千間土居・・・・・・・・・・・・・61
第3章　刎（水刎）・・・・・・・・・・・・63
第4章　田尻惣助、惣馬・・・・・・・・・・65
第5章　現在の千間土居・・・・・・・・・・67

北山の神社仏閣等・・・・・・・・・・・・・69
第1章　北山地区の神社・・・・・・・・・・・・70
1　水天神社　（山下）・・・・・・・・・・・・70
2　八剣神社　（山下）・・・・・・・・・・・・70
3　天満神社　（山下）・・・・・・・・・・・・71
4　玉垂神社　（男ノ子・鞍懸）・・・・・・・・71
5　天満宮　（西原）・・・・・・・・・・・・72
6　天満神社　（上ノ原）・・・・・・・・・・・73
7　若一王子神社（小倉谷・上ノ原）・・・・・・73
8　天神さん　（樋ノ口）・・・・・・・・・・・74
9　錦山神社　（中川原）・・・・・・・・・・・75
10　生目神社　（小路）・・・・・・・・・・・・75
11　稲荷神社・・・・・・・・・・・・・・・・76
12　六所宮　（谷中）・・・・・・・・・・・・77
13　玉垂神社　（井手ノ口）・・・・・・・・・・79
14　愛宕神社　（大倉谷）・・・・・・・・・・・80
第2章　北山地区の寺院・・・・・・・・・・・・81
15　笑月山智願寺　（山下）・・・・・・・・・・81
16　山下山浄福寺　（山下）・・・・・・・・・・82
17　荘厳院　（男ノ子）・・・・・・・・・・・・82
18　萬壽山常寂寺　（小路）・・・・・・・・・・83
19　東光山開運寺　（井手ノ口）・・・・・・・・84
20　飛形山大光寺　（大倉谷）・・・・・・・・・85
第3章　教派教団関係・・・・・・・・・・・・86
21　天理教酒井田分教会　（山下）・・・・・・86
明治以降の北山・・・・・・・・・・・・・87
第1章　北山村の誕生・・・・・・・・・・・・87
1　役場・・・・・・・・・・・・・・・・・87
2　村長・・・・・・・・・・・・・・・・・88
3　駐在所・・・・・・・・・・・・・・・・88
4　郵便局・・・・・・・・・・・・・・・・88

第2章　産　業……89
1　蜜　柑……89
2　梨……89
3　養　蚕……89
4　製造業……90
5　電　灯……90
第3章　交　通……91
1　道　路……91
2　乗合バス……91
3　橋　梁……92
第4章　教育及び式典……94
1　北山小学校沿革史……94
2　歴代北山小学校校長……96
3　北山初の敬老会……96
4　北山初の成人式……96
第5章　字名と姓……97
1　北山と西原の字名……97
2　北山の姓調べ……98
第6章　社会情勢と史跡や民話……99
1　西南戦争関連……99
2　紀元二千六百年奉祝行事……99
3　北山防空訓練実施……100
4　北山公園……100
5　北山の石像遺物……101
6　北山の民話……102
第7章　北山ゆかりの人々……103
1　画家　田崎廣助（本名　田崎廣次）……103
2　俳優　東勇路（本名　中島勇）……104
3　武道家　助廣彌一郎……104
4　武道家　青木楽山……105
第8章　立花町誕生後の主な出来事……106
北山の歴史年表……107
主な参考文献・資料……117
おわりに……118
「北山のあゆみ編集委員会」……119

はじめに

県道湯辺田みやま線と矢部川が最も接近する曲松（井手ノ口）より、我が故郷「北山地区」が広がる。

曲松より小路を経て、小倉谷・上ノ原まで上りながら台地が続く。更に台地の南へ下がると白木用水で潤う西原平野が広がっている。西原平野の南端を白木川が横切る。ここまでが行政的に「北山地区」である。

この台地及び西原平野に茶臼塚古墳・大塚古墳・白木西原遺跡や霊峰飛形山にまつわる伝説や大光寺等連綿と続く人々の営みの跡が見られる。小路付近が北田の中心である。

他方曲松より県道を西方へ進むと南に北山平野が広がり、その西端は山下である。白木川は先に述べたように西原平野を横切り、国見山で蛇行するも鞍懸の中央部に谷をつくり北へ流れている。

これらの地域にも北山今小路遺跡や山下城や山下町・男ノ子焼・千間土居等この地に生きる人々の営みの跡が見られる。

また、明治以降の北山地区の行政・産業・生活面での努力や発展、各村々の神社や寺院等にも人々の営みの跡がみられる。

先人の先を見通した、決して「自分」「今」「お金」だけでない信念や努力工夫に学びながら、今後の「北山」づくりに役立てていただければ幸いである。

＜ 北山地区の位置図 ＞

北山の古代

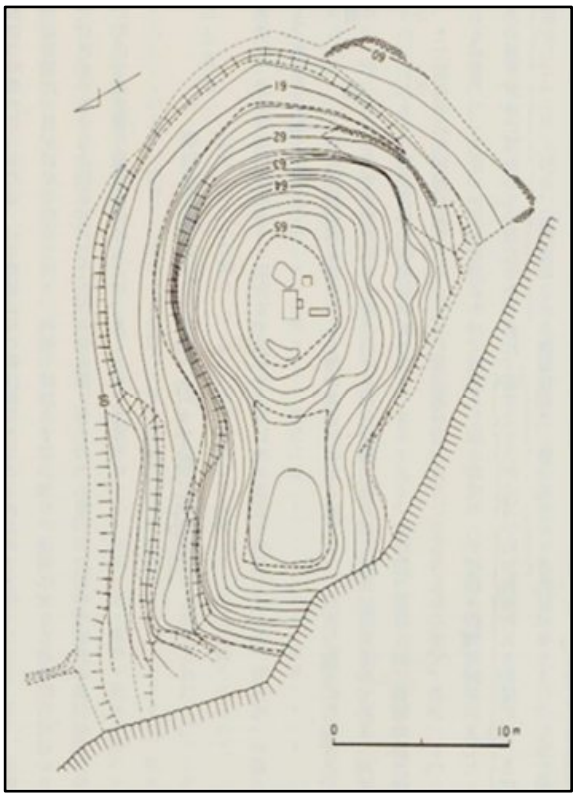
私たちの故郷、この北山の地に6世紀の中頃に位置付けられている「茶臼塚(ちゃうすづか)古墳」がある。

八女地方では八女丘陵上いわゆる筑紫君磐井（つくしのきみいわい）一族の墓域とされる八女古墳群には前方後円墳が12基あるが、茶臼塚は、主軸長が34・5mあり、八女市内で矢部川以南では唯一の前方後円墳で、貴重な遺跡である。

茶臼塚古墳は矢部川を展望する丘陵の頂部に築造されており、八女丘陵上に所在する前方後円墳の大半が前方部を北西にむけるのと同様前方部が北西に向くものであり両者の関連性がうかがわれる。

出土品として、大正末から昭和初期にかけて開墾した際に耳環や人物埴輪(じんぶつはにわ)・円筒(えんとう)埴輪が出土したといわれる。

＜　茶臼塚古墳　＞



＜　茶臼塚古墳実測図　＞

更に昭和25年9月14日付の西日本新聞には「ハニワ人形首，同円筒のほか多数の祝部（いわいべ）式土器、脚付ハソウ等が発見され・・」という記事が出土土器の写真とともに掲載されており、その新聞掲載の人物埴輪や須恵器は、北山の故田崎貞吉氏宅に現存しているとのこと。

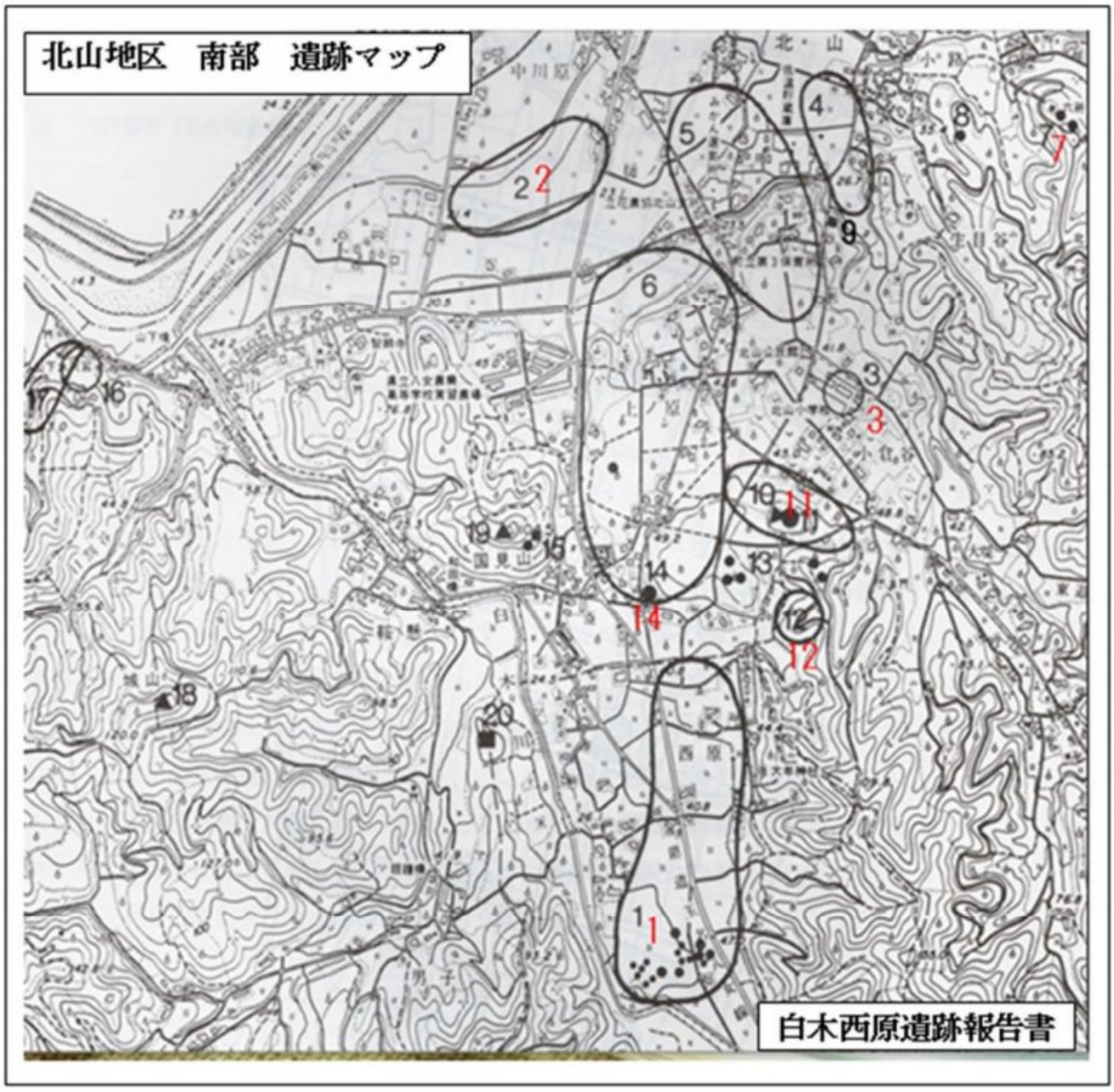
この人物埴輪の顔の表現方法が八女市立山山古墳群出土の同時代の埴輪と非常に似ていて、両者は同じ場所で製作されたとも考えることが出来る。

当時前方後円墳を築造できる豪族が北山の地に勢力を張っていた証拠と言えよう。尚、磐井の寿陵とされる岩戸山古墳は6世紀初めに位置付けられている。

北山の地は、縄文時代早期より晩期、弥生時代中期・後期・後期末、古墳時代初頭・中期・後期、飛鳥時代へと連綿と人々の営みが続けられてきている。

人々の営みの跡いわゆる遺跡の主なものを紹介し、故郷北山の古代人の生活への想像がかき立てられ、古代遺跡（住居跡や古墳・横穴墓等）への興味・関心を高められたらと願う。

＜ 茶臼塚古墳出土の人物埴輪 ＞



1　白木西原遺跡	**2　北山今小路遺跡**	**3　北山小学校遺跡**
4　北山浄清田遺跡	5　北山遺跡	6　上ノ原遺跡
7　六所宮古墳群	8　小路古墳	9　今出坂古墳
10　小倉谷遺跡	**11　茶臼塚古墳**	**12　小倉谷横穴墓群**
13　茶臼塚古墳群	**14　大塚古墳**	
15　上ノ原古墳群	16　山下遺跡	17　山下横穴墓群
18　山下城址	19　国見岳城址	20　男ノ子焼窯跡

＜　北山地区南部　遺跡マップ　＞

1　幾野々原遺跡　2　北山八竜遺跡　3　北山浄清田遺跡
4　小路古墳　5　今出坂古墳　6　北山今小路遺跡
7　北山小学校遺跡　8　六所宮１号墳　9　六所宮２号墳
10　六所宮 3 号墳　11　谷中古墳　12　曲松遺跡
13 稲荷山横穴墓群　14　野広尾横穴墓群　15　千間土居

＜ 北山地区北部　遺跡マップ ＞

第1章　縄文時代の北山

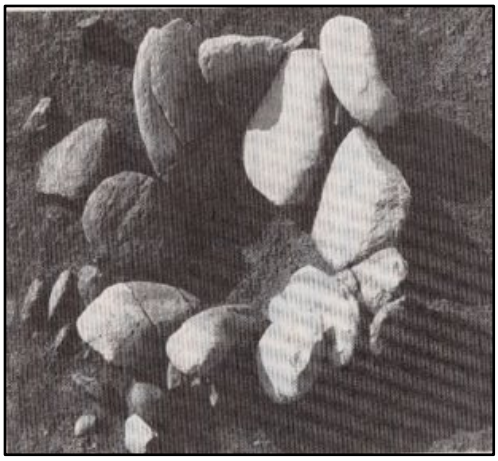
７ページの「北山地区の縄文時代」年表にあるように、この北山の地に縄文時代を生き抜いた人々の痕跡が、白木西原遺跡、北山小学校遺跡、北山今小路遺跡に見られる。

１　白木西原遺跡

縄文時代早期頃（今から９０００年前）と縄文晩期頃（今から３０００年前）の２つの時期が検出されている。

早期頃は、押型文土器を中心とし、黒曜石(こくようせき)やサヌカイトの原石や多数の剥片（はくへん）・すり石・台石等が出土し、石組炉が検出されている。近くに竪穴住居跡がある可能性がある。これらの出土遺物は石器づくりや、獲得した食料の加工を示している。

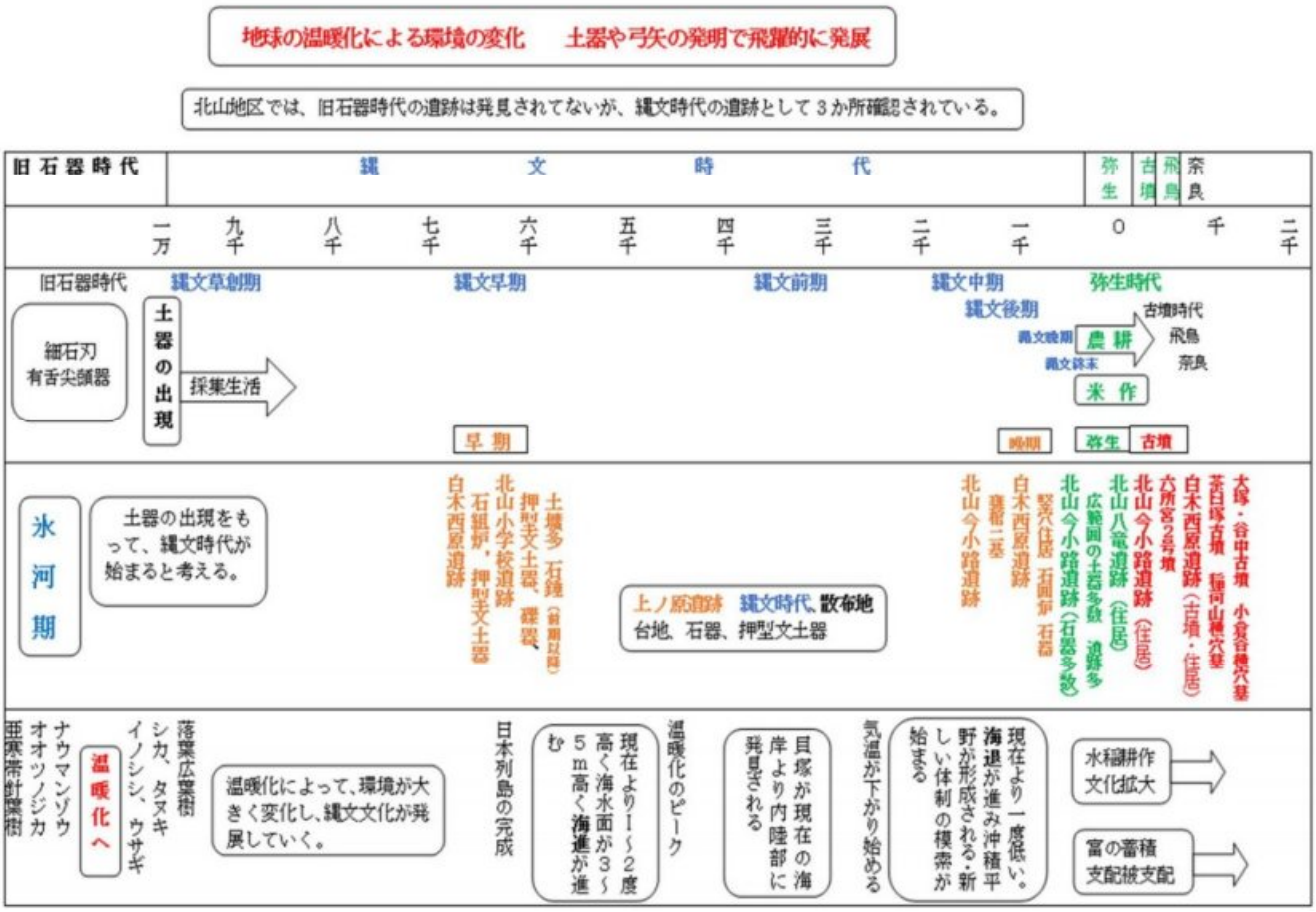
晩期頃は、白木西原古墳群の12号墳の下を中心に、９軒の竪穴住居跡が検出されている。１辺が４～６ｍの方形や長方形だが、主柱穴は明確ではなかった。１軒に石囲炉、３軒に焼土が確認されている。この時期の住居跡の例は少なく、炉の存在も明確なものも少ない。また、縄文晩期の土器や磨石（すりいし）・敲石（たたきいし）・凹石（くぼみいし）・扁平（へんぺい）打製石器・十字形石器・円盤形石器・磨製（ませい）石器等が出土している。

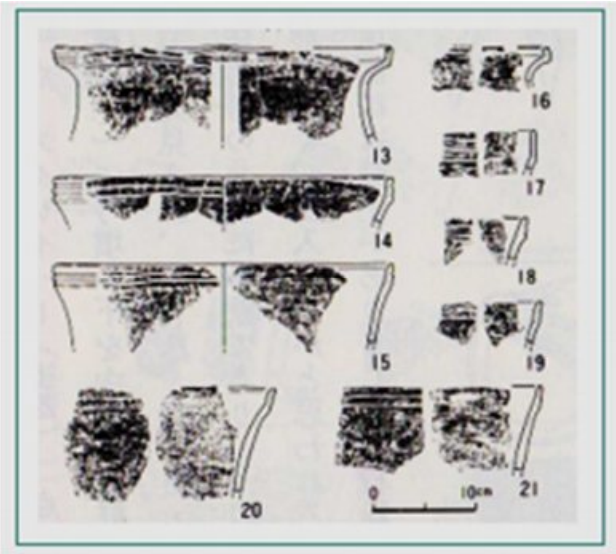


＜　石組炉　＞

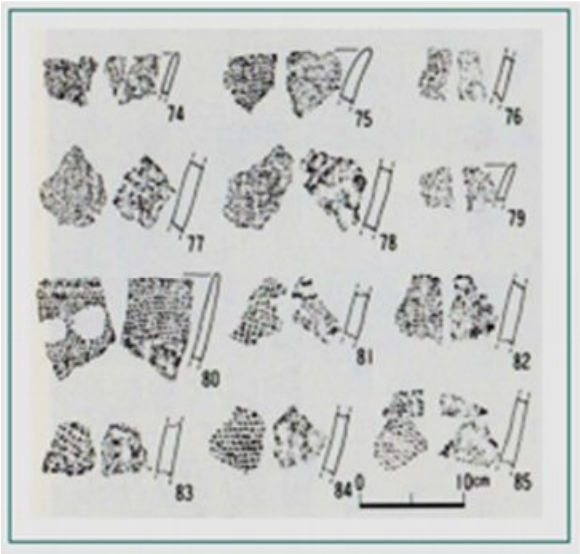
＜　１２号墳下の住居跡　＞

北山地区の縄文時代（縄文文化）　『立花町史』等より作成





白木西原遺跡縄文晩期土器
口縁部が外へ反っている。



白木西原遺跡縄文早期土器
山形や楕円の押型文

2　北山小学校遺跡

縄文時代早期の遺構が検出されている。楕円形の土壙（どこう:穴）が3基、隅丸（すみまる）長方形の土壙（落とし穴らしき）が1基、その他不整形土壙21基である。

土器は山形押型文（やまがたおしがたもん）土器の破片、石器は礫器（れっき）、石錘（せきすい）、敲石（たたきいし）が出土している。周辺は上ノ原遺跡（縄文時代遺跡の散布地）として認められている。

3　北山今小路遺跡

縄文時代晩期の遺構が検出されている。小児用甕棺（かめかん）2基と縄文晩期の土器・打製石斧（せきふ）・磨製石斧・打製石鏃（せきぞく）などが出土している。

縄文晩期に9軒もの住居跡を検出した白木西原遺跡は貴重であり、縄文早期と晩期の間の空白期間を埋める遺跡が、将来検出される可能性がある。

＜北山小学校遺跡＞

第2章　弥生時代の北山

9ページの「北山の古代遺跡年表」にあるように、この北山の地に弥生時代を生き抜いた人々の痕跡が、北山今小路遺跡、北山八竜遺跡、曲松（よごまつ）遺跡、幾野々原（きののはる）遺跡等に見られる。

1　北山今小路遺跡

弥生時代中期頃(今から2000年前)と弥生時代後期後半から古墳時代初頭頃（今から1700年前）の2つの時期が検出されている。

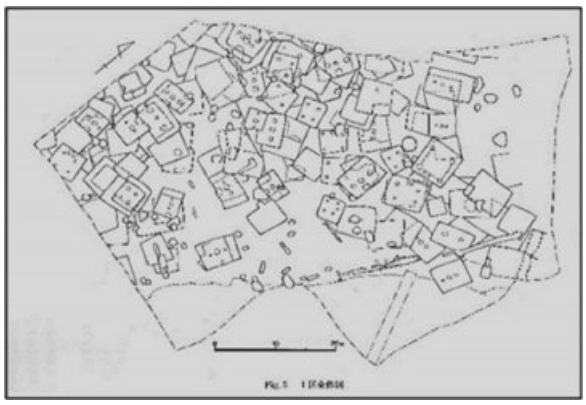
中期頃は、数軒の長方形プランの竪穴住居跡のみが検出されている。

後期後半から古墳時代初頭頃は、この北山今小路遺跡の主体をなす時期であり、200軒もの竪穴住居跡に、大溝など溝が9条と土壙3基・甕棺墓6基・木棺墓など多数の遺構が検出されている。

甕棺は弥生時代終末期のもので後述する曲松（よごまつ）遺跡のものとよく似た甕を使っている。

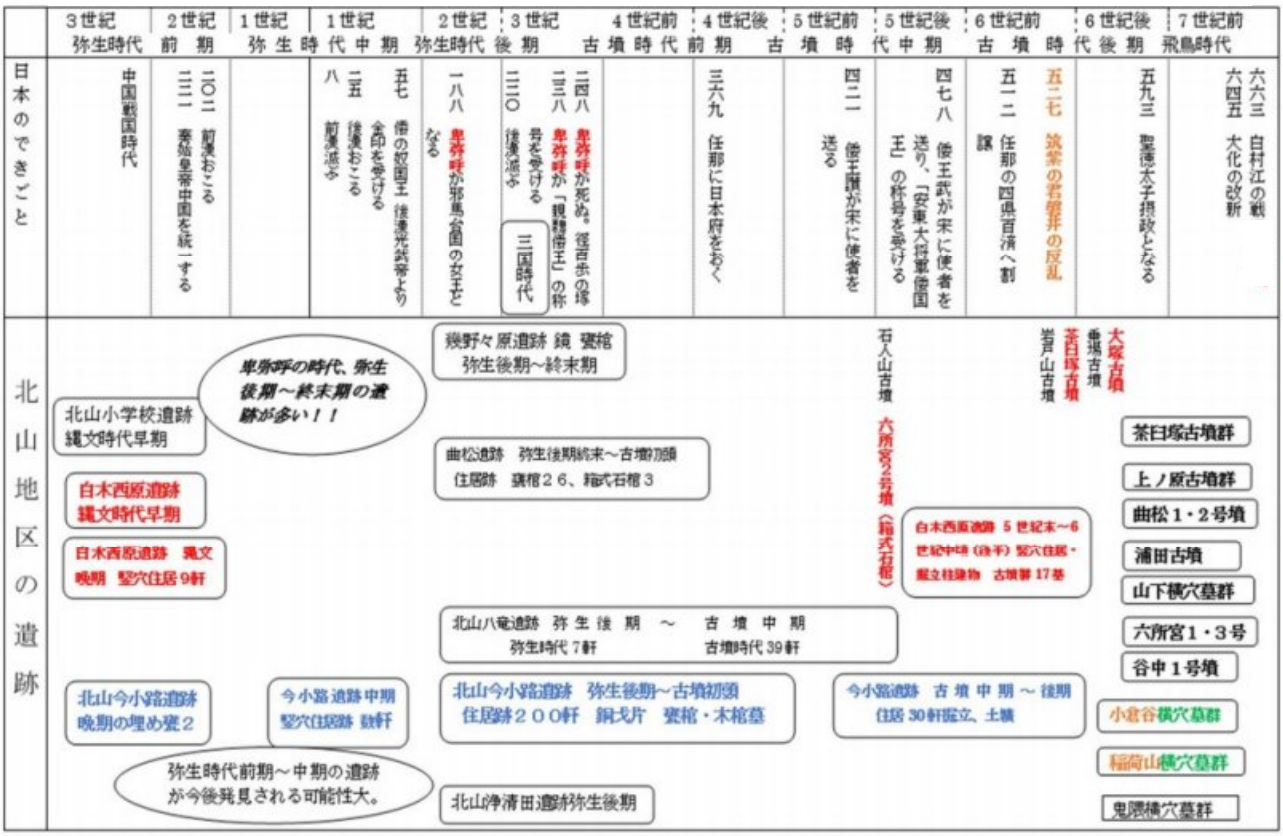
その他、この遺跡からは石英斑岩（せきえいはんがん）が大量に出土している。矢部川周辺の石英斑岩が鋳型として使用されている研究結果があり、出土した石英斑岩と鋳型の成分が同じであるとの分析結果も出ている。この石英斑岩は奴国の中心に比定される須玖岡本遺跡では銅戈（どうか）や銅剣（どうけん）の鋳型として使われていることが分かっている。この地から斑岩が供給されていることも科学的に証明されている。北山今小路遺跡が供給源とはすごいことである。

また、大溝内から祭祀に使用されたと思われる貴重な銅戈片が出土している。



＜ 北山今小路遺跡の住居跡 ＞

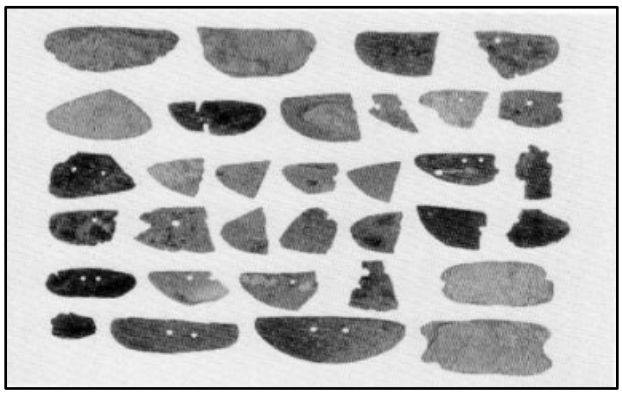
北山の古代遺跡年表　『立花町史』等より作成



竪穴住居跡は、後期の段階では長方形をなし、炉を挟み、２本の主柱穴があってベッド状遺構がある。古墳時代初頭になると４本柱になるらしい。ベンガラが付着している例も多く、床面から石杵（いしきね）とベンガラが検出された住居跡も出ている。

多量の土器の他、石包丁・石鏃（せきぞく）・砥石・石錘・石杵（いしきね）などの石器、投弾、青銅器（戈・鏃）、鉄器（鏃・鎌・斧）などが出土している。土器には幾内系、肥後系のものもあり、庄内式～布留式期の土器が多い。

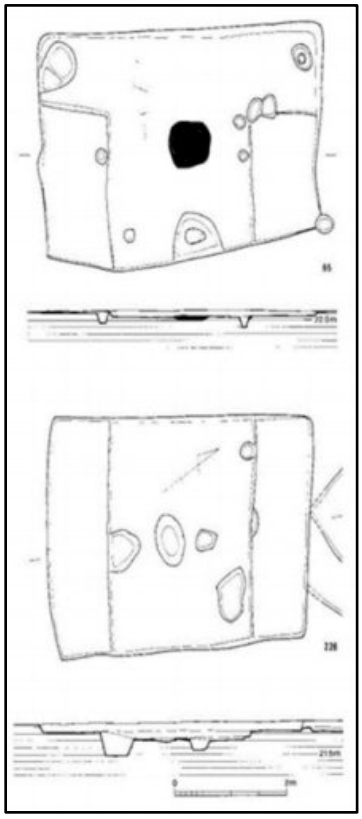
石包丁は30数点出土し、通常の２孔を有するもののほか無孔のものもあった。また、瀬戸内海系と見られる両端にえぐりをいれたものが２点あった。



＜　出土石包丁　＞

尚、輝緑凝灰岩（きりょくぎょうかいがん）製のものも数点あり、他は全て片岩系であるが中には未完製品と思われるものもあった。１００点を超す砥石が出土した。用途は鉄器を研ぐものとしか考えようがない。

稲作農耕を営みつつ青銅器を用いたまつりを行い、石器を製造し、多くの鉄器を使用し、福岡地方や瀬戸内海や肥後地方などとの広範囲の交流をうかがわせる大きな集落が存在したと考えられる。



＜ 住居跡の様子＞

＜北山今小路遺跡発掘の様子＞

2　北山八竜遺跡

弥生時代後期後半（今から１８００年前）に位置付けられる竪穴住居が７軒検出されている。そのうち１軒には炉が確認された。平面プランは１軒が円形で他は方形で、２本柱が１軒、４本柱が２軒確認された。残り４軒の柱は不明瞭であり、遺物は土器のみであった。

＜ 北山八竜遺跡 ＞

3　幾野々原遺跡

弥生後期から終末期の竪穴住居２棟、掘立柱建物２棟、甕棺墓１基などの遺構が検出されている。甕棺は曲松遺跡の甕棺に似ている。

西端部の土壙から後漢鏡の方格規矩鏡（ほうかくきくきょう）の破片が出土している。破鏡（はきょう）の性格を有するものと思われる。矢部川左岸流域での出土は、弥生時代後期の貴重な資料と言える。

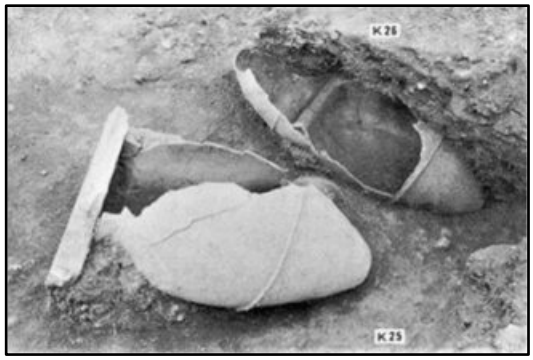
＜ 後漢鏡の破片 ＞

4　曲松遺跡

弥生後期後半から終末にかけての甕棺墓２６基とほぼ同時期と思われる箱式石棺墓４基が検出されている。後期後半から古墳時代の始めまで営まれたと考えられるが、副葬品は全くなかった。

この遺跡は矢部川を見下ろす標高６４ｍの丘陵上にあり、その下の標高４２ｍの所から竪穴住居跡が一軒

＜ 曲松遺跡の発掘調査 ＞



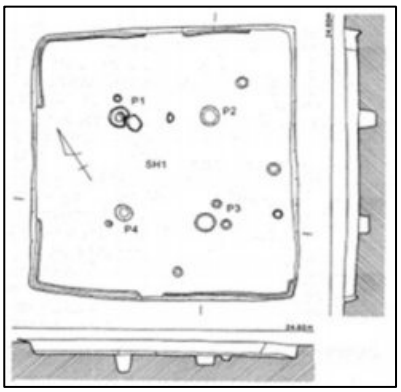
＜ 甕棺墓の様子 ＞

検出され、方形で主柱穴が４個検出されている。中央に焼土穴があり、移動式カマドも発見されている。後で述べる北山八竜遺跡の移動式カマドに似ている。

ほとんどが最も注目される女王卑弥呼（ひみこ）の時代である後期から終末期の遺跡である。大集落の今小路遺跡を中心に貴重な遺跡・遺物が検出されている。

第3章　古墳時代の北山

14ページの「八女古墳群と立花の古墳」にあるように、古墳時代を生き抜いた人々の痕跡が住居跡やたくさんの古墳・横穴墓に見られる。先ず、住居跡が検出された遺跡について述べる。



＜ 八竜遺跡の住居跡＞

１　古墳時代の住居跡等

①　北山八竜遺跡

この遺跡からは、５世紀中頃から６世紀中頃にかけて営まれた39軒の住居跡が検出されている。平面プランは方形で、４本柱の住居が大半で、そのうち10軒にカマド跡が確認できた。後述の北山今小路遺跡の住居跡と同様であったと考えられる。

次の写真は移動式のカマドである。庇(ひさし)や把手（はしゅ）が無く、天井部が甕の口縁のような形態をとっている。祭祀などの用途で共用してつかわれたとも考えられる。

この遺跡のすぐ東の丘陵上に先に述べた幾野々原遺跡がある。

＜ 移動式のカマド ＞

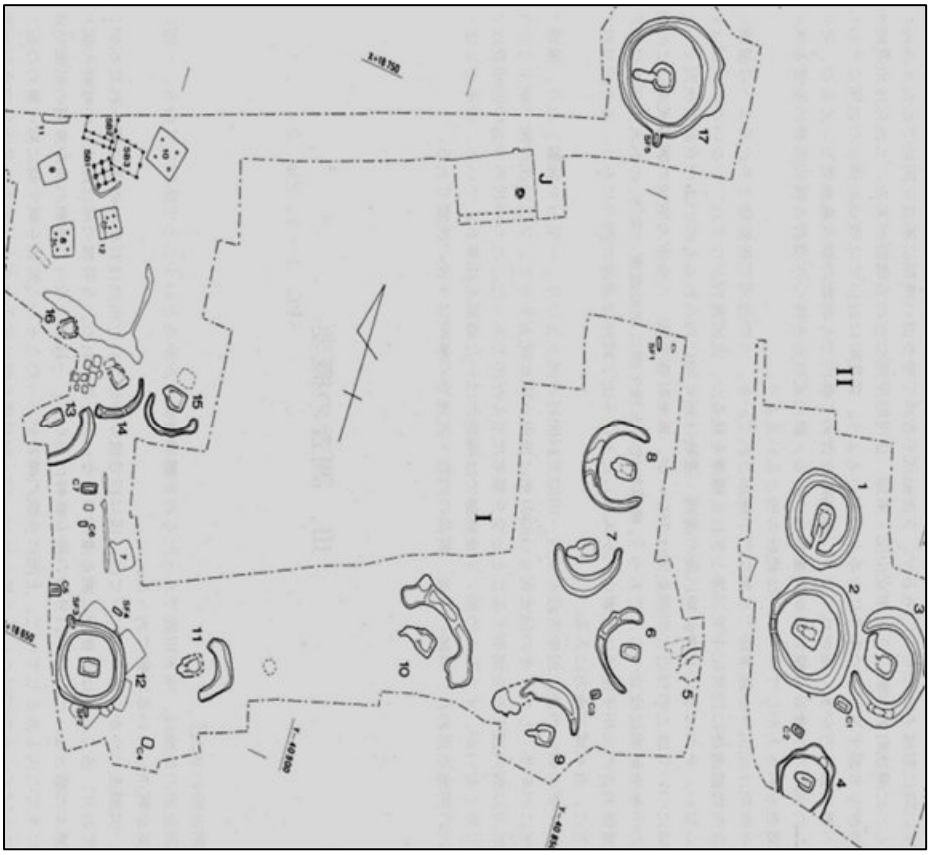
② 北山今小路遺跡

この遺跡からは、古墳時代後期（今から１５００年前）の竪穴住居跡が20軒ほど、掘立柱建物跡・土壙が検出されている。住居跡は４本柱でカマドを有するのが大半である。出土遺物としては土師器・須恵器・鉄器・勾玉（まがたま）などである。

③ 白木西原遺跡

この遺跡の古墳時代の遺構として、６世紀後半代（今から１４００年前）の竪穴住居跡５軒と掘立柱建物跡３棟、箱式石棺墓７基、それに５世紀末（今から１５００年前）から６世紀後半代の古墳17基が検出されている。この古墳群については、後述する。

下の実測図の西隅（図左上）の部分には古墳は全く造られておらず、住居跡や建物跡等が検出されている。この遺構は、もっと北西方向へ広がっているものと思われる。竪穴住居はいずれも、６世紀後半代に建てられたカマドを持った小型住居と、カマドを持たない大型の住居が見られる。

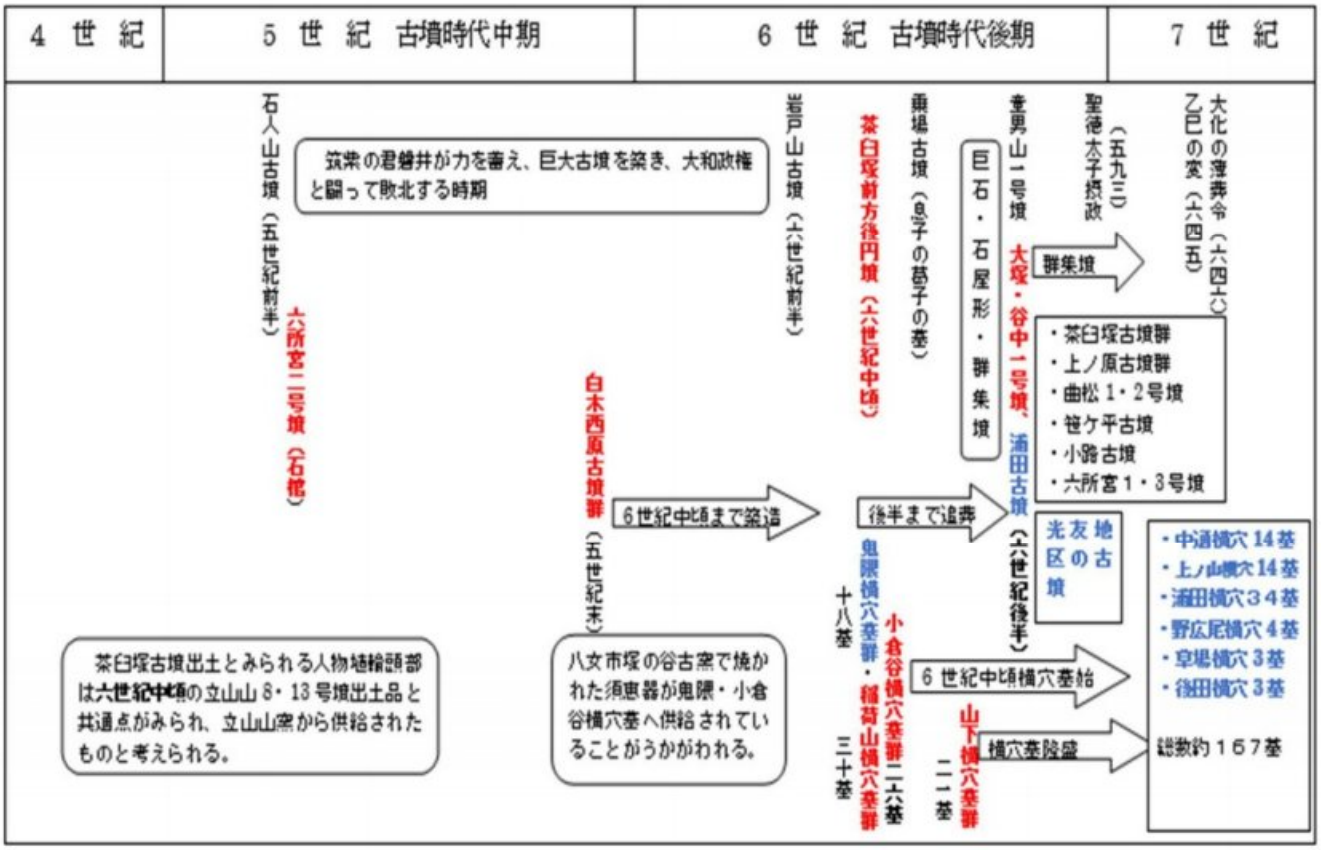


＜ 白木西原遺跡全体の実測図 ＞

＜　古墳時代の住居跡　＞

八女古墳群と立花の古墳（北山・光友）

『立花町史』等より作成



追葬（白木西原古墳群参照）が行われていた同時期に、住居が営まれていたことになり、古墳を目の前にして、住居を営むという珍しい風景が想像される。

丸く見えるのが全て古墳であり、17基ある。

2　古墳・横穴墓等

①　六所宮古墳群　六所宮2号墳

この古墳群には、3基の古墳が確認されている。2号墳について、『立花町史』で、「5世紀前半代の石人山古墳（広川町）被葬者と同時代の遺跡として確かなものはないが、六所宮の石棺を内部主体とする古墳がこれと近い時期に相当する可能性がある。」と記していることは注目すべきである。

この石棺については、昭和48年11月1日発行「広報たちばな」に、次の記述がある。

＜六所宮山頂の箱式石棺＞

「六所宮の参道新設の折ブルドーザーにて作業中、昭和46年2月5日1個の石棺が発見されました。中略、この石棺の中からガラスの小玉1個、鉄片1個、鉄鏃1個と土師器の破片が4個でました。」

『旧柳川藩志』の中巻にも次の記事がある。

「もと六所権現と称す。先年、境内の松の根を堀りし時、九尺余の船形の櫃を掘り出したるに、その頃疫流行したれば、この祟りなりとて元の如く之を埋めしという。其のしるしに松を植えおきし由なり。」

「今回発掘されたものは、石室の内面のほのかな朱の色もとどめて発掘の折の姿をそのまま残しています。」とある。江戸時代より有名な古墳である。

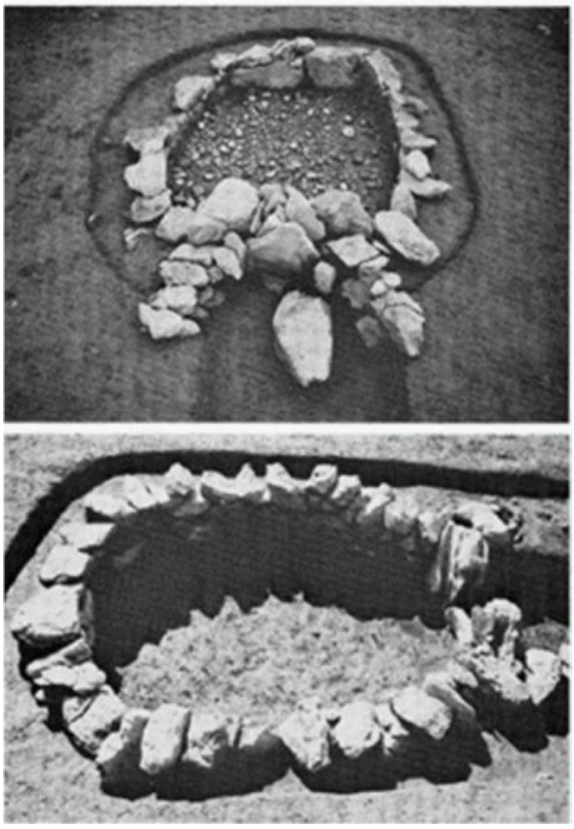
＜　六所宮２号墳　＞

写真は2号墳の現状である。箱式石棺はこの中に埋め戻されている。

② 白木西原古墳群

この遺跡において古墳17基が検出された。

築造時期について、5世紀末から6世紀中頃まで順次築造され、一部6世紀後半まで追葬されたとしている。ほとんどの古墳は周溝を巡らし、主体部は横穴式石室の古いタイプの竪穴系横口式石室と横穴式石室である。石室は全て単室で、平面の形は、竪穴系横口式石室は長方形だが一部やや胴張りのものもみられ、横穴式石室は全て銅張りの形である。



＜ 白木西原古墳群の様子 ＞

出土品は少なかったが、ほとんどの古墳の周溝から土師器が出土し、一部には須恵器も出土している。

石室内部からは、鉄器、馬具、工具類の刀子、鉄斧や耳環、管玉、ガラス玉、水晶玉、土玉、水晶などが出土している。また、石室の入り口の墓道やその周辺からは土師器や須恵器が出土している。

この群集墳の特徴として、『立花町史』は「全国的に群集墳の形成が6世紀中頃から6世紀後半代であるのに対して、5世紀末から6世紀中頃に営まれていることである。また、この時期が筑紫君磐井（つくしのきみいわい）が君臨して、大和政権と対決した時代でもあり、磐井の動向との関わりの中でもこの遺跡の占める位置は重要な意味を」と記している。尚、この白木西原古墳群より南には古代の遺跡は確認されてない。

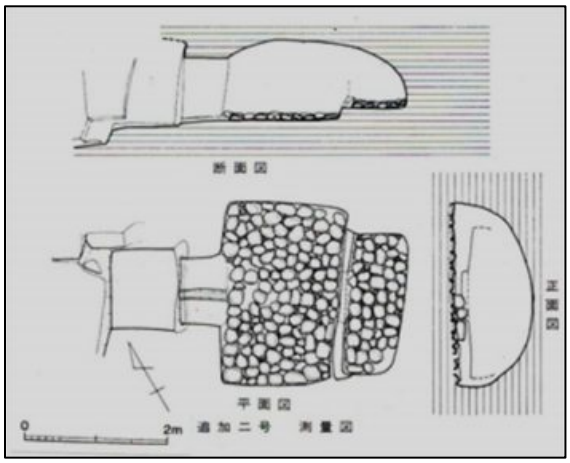
③ 稲荷山横穴墓群

キウイ団地造成中に全部で29基発見されている。築造年代は6世紀中頃から6世紀後半まで築造され、その後7世紀中頃（飛鳥（あすか）時代）まで追葬されている。白木西原古墳群の築造終了時及び、茶臼塚古墳の築造と時期を同じくして、築造が始まったと言える。北山地区の中で最も古い横穴墓群であると言える。また、左の実測図のように奥に畳1枚の広さで一段高いベッド状の屍床が設けられている例や「コ」の字状に4区画して屍床（ししょう）を配置した「肥後タイプ」や「L」字状に2か所屍床を設けたもの等、町内の他の横穴群とは際立った特徴を持っている。床面には河原石を敷石としている。

耳環（じかん）や馬具、鉄鏃（てっぞく）、須恵器が出土している。18号墳からは左の写真「船の線刻画」が発見されている。

＜ 稲荷山追加２号横穴 ＞

＜１８号墳の「船の線刻画」＞



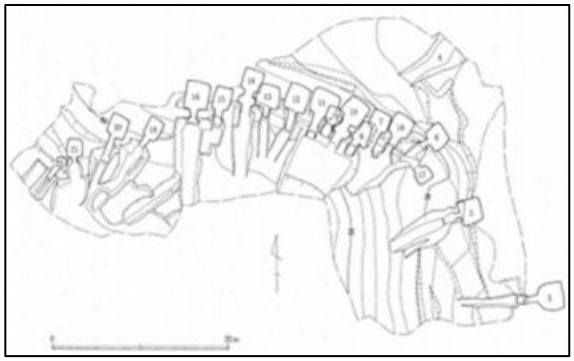
＜ 稲荷山横穴墓群実測図 ＞

④　小倉谷横穴墓群

総数30基をこす横穴墓群だったと思われる。築造は6世紀中頃に始まり、6世紀後半から7世紀初頭が主で、7世紀後半頃まで追葬が続く。稲荷山横穴墓群や鬼隈横穴墓群（光友日枝神社裏）の始まりが、6世紀中頃と位置づけられていることと符合する。

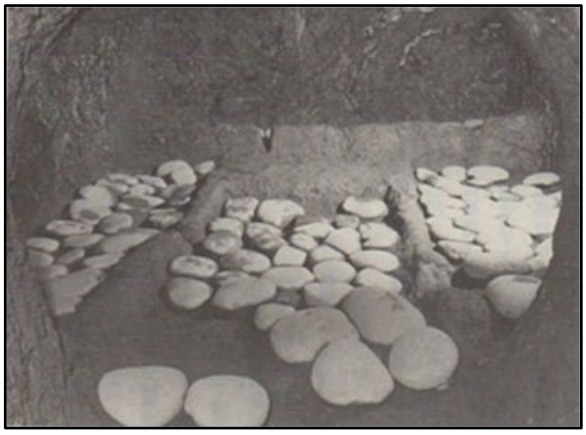
次の写真は、調査中の小倉谷横穴墓群、下の図はその実測図である。北西側にある森は茶臼塚古墳である。

＜ 小倉谷横穴墓群 ＞

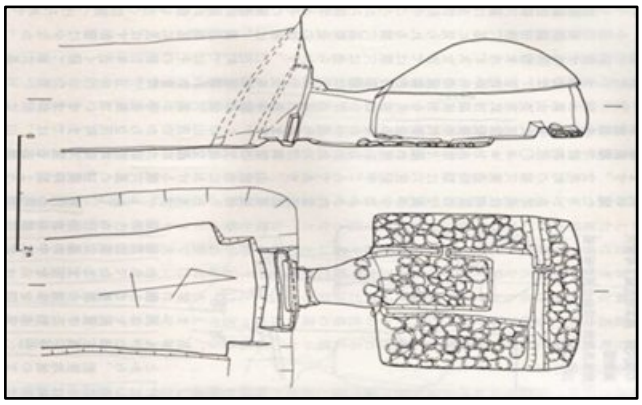


＜ 小倉谷横穴墓群実測図 ＞

横穴墓の構造としては、屍床（ししょう）を「コ」の字状に配置する肥後タイプが5基存在することが確認され、熊本県境にある立花町の古墳時代の文化に肥後文化の影響が及んでいたことが明らかになった。また、石室構造としては複式が2基で、他はすべて単式である。これは半数が複式構造である鬼隈横穴墓群との違いが見られる。幸いなことに5基が未盗掘であったので多数の遺物を検出している。



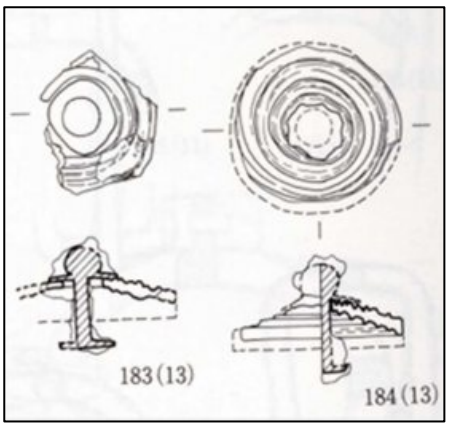
＜ 肥後タイプの様子 ＞



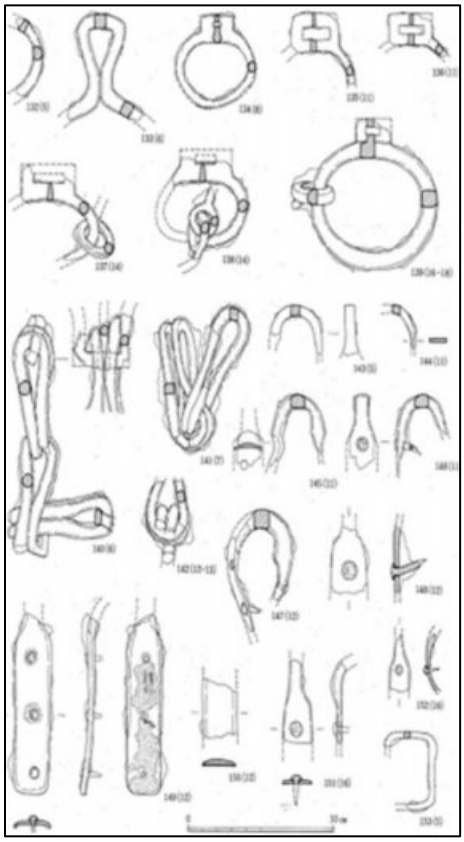
＜屍床を「コ」の字状に配置する肥後タイプ＞

土器では須恵器（すえき）や供献土器の土師器（はじき）類が、墓道や前庭部から多数発見されている。

鉄器には、武器、馬具、工具、農具などがあり、特に、馬具が多いのが目に付く。この規模の集団墓がこれほどの馬具を保有していたことは、６世紀中頃～後半頃にかけて、先に述べた盟主的存在の茶臼塚古墳と大塚古墳の被葬者を頂点とした、騎馬集団を形成していたと推測でき、中でも左図の貝飾金具の出土は注目される。広川町や瀬高町女山の後期古墳出土のものを合わせて、南筑後で３例目となる貴重な遺物である。



＜ 貝飾金具 ＞



＜ 出土した馬具 ＞

装身具の種類は、耳環と勾玉・管玉・切子玉・算盤玉・丸玉・小玉・臼玉などの玉類と貝釧（かいくしろ）がある。耳環は66個出土している。鉄地金胴張・銀張。３号横穴７個、16号横穴からは総数21個出土し、８セットが数えられる。貝釧は11号横穴から、イモ貝製の釧の破片が１点出土している。大きさから判断すると子供か女性のブレスレットであろう。

須恵器については、八女市塚の谷古窯跡からの供給であることが判明している。このように八女丘陵とのつながりが証明されている。

＜16 号横穴墓から出土した装身具＞

⑤　大塚古墳

北山丘陵の西端の南斜面に位置していて、上ノ原古墳群の一号墳とされている。直径31ｍの墳丘を持つ大型の円墳である。立花地区内で最大の円墳であり、通称「立花大塚」と呼ばれている。

巨石を用いた南西に開口する、典型的な横穴式石室で、長さ11・9ｍを測る長大なものである。

築造は6世紀後半（約１５００年前）とされる。群集墳が出現する時期の大円墳であり、茶臼塚古墳に次ぐ時代の盟主級の古墳であったと推察される。

出土品として、光沢のある金環（きんかん）、刀子（とうす）の小片、大刀の一部、鉄鏃の小片、鞍の一部、留金具等である。円筒埴輪や須恵器、土師器も確認されている。

＜ 大塚古墳 ＞

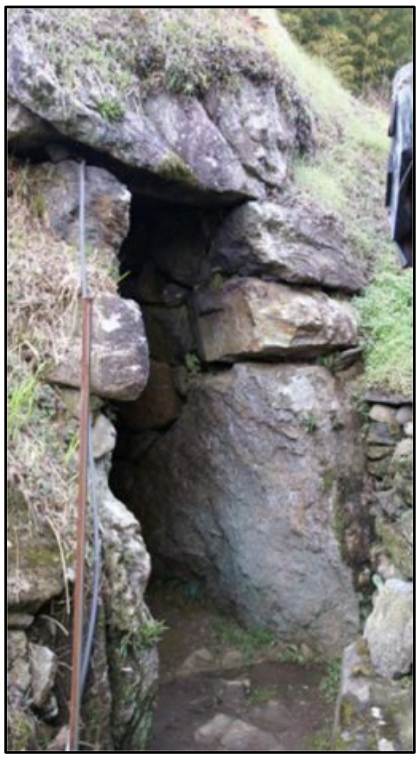
南斜面には「塚がたくさんあった。」と聞く。

一方、茶臼塚古墳が見晴らしのいい丘の頂部に築かれているのとは対照的である。

大塚古墳は巨石古墳としては、比較的古い方に属するもので、他に石屋形をもつ谷中古墳がある。

以上の住居跡や古墳・横穴墓から北山の古墳時代を推察すると次のようなことが言える。

小倉谷横穴墓群の南西５００ｍ、白木西原遺跡では、５世紀末から6世紀中頃にかけて群集墳が築造され、６世紀後半を中心とした集落が形成されている。この古墳群の終焉とともに6世紀中頃から茶臼塚古墳



＜ 大塚古墳の入口 ＞

や小倉谷横穴墓群・稲荷山横穴墓群が造られ始めている。白木西原の集団が奥津城（おくつき）を、小倉谷等に移行した可能性が指摘できる。小倉谷横穴墓群が白木西原遺跡の方向、つまり、白木川の右岸に形成される河岸段丘に向けて開口しており、小倉谷横穴墓群を保有した集団の居住区域が想定できる。

その後、横穴墓群の隆盛時の６世紀後半頃、大塚古墳が築造される。２基の古墳の被葬者はこの一帯の累代の盟主的存在で、傘下に置かれた集団が白木西原古墳群、小倉谷横穴墓群・稲荷山横穴墓群等を築造したと考えられる。もちろん、上ノ原古墳群や茶臼塚古墳群等、北山地区の古墳全体と考えられる。

今後この時代の大きな集落跡が発見される可能性やどこに集落があったのかなど興味深いものである。

第４章　茶臼塚古墳　大塚古墳への道

北山地区は、縄文早期に始まり、縄文晩期・弥生中期・弥生後期～古墳初頭・古墳中期・古墳後期の遺跡の調査が行われ、古代の様子がうっすらと描けるようになってきている。空白の時代もあるが、人々の営みが突然と消えることはなく、今後空白の時代を埋める遺跡や遺物の発見が必ずあるものと考えている。

今後の追究点として、北山今小路遺跡の他地域との交流の様子や墓地・水田跡、茶臼塚古墳と大塚古墳の対照的な立地の違い、群集墳と横穴墓の違い等がある。

縄文時代から古墳時代まで徐々に発展し、茶臼塚古墳や大塚古墳を造営することが出来る大きな力を持った勢力が、この北山丘陵を中心に存在したことを疑うことはできないし、八女丘陵の磐井一族の支配下にあったことが考えられ、その盛衰と共にあったことが想像できる。

調査報告書を詳しく読み進めると「貴重」と言える発見がいくつもあり、また、追究点もでてきた。八女地区の中に占めた北山地区の存在を後世に伝えていきたいと強く思う。

飛形山大光寺

第1章　大光寺の歴史

大倉谷の入り口に「飛形山大光寺」があり、本尊は、十一面観世音菩薩を祀っている。境内の頂上に愛宕神社を祀り、中腹に大光寺の本堂と高良大社の分社がある。現在は、臨済宗妙心寺派（禅宗）に属している。

＜　飛形山大光寺　＞

『飛形山大光寺縁起』

筑後国上妻郡北田村飛形山大光寺は、推古天皇の17年（６０９年）、百済国より来朝した日羅聖人の開基と伝えられる。本尊の十一面観世音菩薩はじめ諸仏も聖人の作といわれる。それが推古天皇の耳に達し、補陀落山大光寺と勅額を賜って寺門は倍々繁栄した。

その後幾星霜を経て、宝亀５年（７７４年）落雷によりすべての建物が焼失した。九州の辺ぴな所である為堂塔伽藍の復興もできないありさまだった。

後に行基菩薩が諸国修行の途中、この山に立ち寄り、堂塔の礎だけの様子を嘆き暫く滞在し、十一面観世音菩薩を彫刻し小堂を再建し、お参りを絶やさぬ様にと近隣の人々を教えさとして筑前の国へと旅立たれた。

その後平安時代寛平年間（８８９年～９８７年）の頃、大宰府の郡主藤原高房は、観音信仰が篤くいつか観音さまの像を作りたいと思っていた。そこで、唐よ

り来た仁僑という者に金を渡し白檀香木を求めさせた。仁僑は、唐に帰り白檀の霊木を求め得てまた日本に行こうとした。しかし、唐朝の政府に知られることとなり日本に行くことは不可能となった。そこで仁僑は、この白檀の木に日本国の藤原高房に届くようにと墨で書いて海に流した。高房は、終にこの香木に会うことなく亡くなった。

その子黄門（黄門とは中納言の中国呼び名）侍郎が大宰府近くの海岸で光を放つ香木を見つけ、そこに書かれた文字から父高房が求めていた香木と知って喜んだ。急いで亡父の遺意に報いたいとこの香木を持って京都に向う時、摂州嶋下郡（大阪府茨木市）で暫く休んでいざ出発しようとするとこの香木はまったく動かなかった。黄門は驚いて宣誓し「若し此の処に縁があるならば、観音菩薩彫刻成就がなった時此の地に安置申すべし」といって引いたところ軽く動いた。

黄門は、大変喜び先ず長谷寺へ参り志願成就の事を祈った。7日目の夜の御告げに、「京都に至ったならば必ず良い仏師を遣わすべし」とのお告げを受け急ぎ京都に向かった。時に一人の童子が一刀を持って現れた。「我は仏師なり。尊容を造るべし。我に任せて」と言う。黄門喜びながらも怪しみ、このような霊木を再び得ることは難しいと思い、他の木で試しに造らせてみれば頗る容貌絶妙であった。そこで一室を童子に与えた。その後童子は、90日で成し遂げると誓約して室に入り戸を閉じて出てこなかった。黄門も、精進潔斎して既に90日になったので戸を開いてみると童子の姿はなく、ただ千手観音菩薩の像だけが厳然としてあった。これは即ち長谷観音の化身に違いないと感激し、其の霊像を約束の通り摂州嶋下郡に移し一寺を建立し、亡父の冥福を祈った。

かくして、もう一体は試みに作らせた尊像を持ち帰り、大宰府に帰って安置し朝夕拝んでいた。ところが、この千手観世音菩薩は夜な夜な光を放って筑後の方へ飛んでいき、夜明けには帰っていることが数日続いた。黄門は、不思議に思い前日より筑後へ飛びだし

彼の光明の至る所を窺ってみると、この補陀落山の地であった。黄門は、この山を尋ね登ってみると一つの粗末なお堂があって十一面観音菩薩の像がぽつんと立っていた。黄門は歓喜し新にお堂を建立し、十一面観世音菩薩と自分の千手観音菩薩を一緒にお祀りすることにした。このような因縁によって観音堂がある山を飛形山と言うようになった。

飛形山のお堂は西向きに建っていた。そのため西方の海面に光明を放つこと数ケ月に及び、それで魚が獲れなくなり生活が困窮し状況打開策を漁師たちはたびたび申し入れた。寺の僧にこの事を申し上げ、東向きに立たせることにしたら以後魚が獲れるようになり家業は順調となった。

その後再び火災になり、堂宇、観音像ともに消失してしまった。時は、応仁の乱より天正慶長の頃まで全国騒乱の世となり、人々は嘆き悲しみ一日生き延びることだけを思っていた。ここ飛形山仏閣の近くに大木の五葉松があり、信心なき無道人が切り倒し飢えをしのぐために炭に焼こうとしたら、突風が吹いて本堂に火が燃え移った。必死に消そうとしたが一人ではかなわず山中深く逃げ去った。ちょうどその時別の人が駆けつけ、斧で御厨子を打ち破ろうとしたが、頑丈に作られた厨子はなかなか壊れず、風強く吹きまくる中斧を打ちこんだ穴から手を入れて辛うじて千手観音の手を取り出すことができた。悲しいことに黄門侍郎が丹誠を込めて作った長谷の観音菩薩像も空しく焼失してしまった。幸いに焼け残った千手観音像の一手だけが残り年月が過ぎ去っていった。その後は誰一人として再興する人もいなかった。

香や花を時折備えていた源佑という僧が見るに見かねて寄付を募り、小さなお堂を建て千手観音の像を彫刻して安置した。それより宝永の今日に至るまで百余年が過ぎていた。

今、大神の姓十時氏は、ただ一人この山に登って古き御手の一つ残っていることを悲しみ千手観音の像を再び刻み、像の胎内に古い御手を納められる寄進の時

を待っていた。寶永３年になり谷中の住民が発願して飛形山を此の地に移し、仏勅寺の末寺になる事を願い出、のぞみ通りこの地に草堂一宇を再建した。この時、十時氏は先きの寄進仏を送って本尊として安置した。

篤志のある人は言うまでもなく、たとえ信心の薄い人でも煩悩無尽の苦海から救い、涅槃常楽のお浄土に至らしめようというのが観音さまの大慈大悲の願である。

今は朽木の一部だけが残り、これだけが日羅聖人の手形として寶永３年に至る迄１０９８年が経っている。日羅聖人は敏達天皇の12癸卯年天皇の招請に応じて来朝されたものである。現在、寶永３年迄１１２４年になる。これ時　寶永丙戌３年仲春上旬

二尊寺・仏勅寺・大光寺の中興開基

妙心派下　了岳改古傳書

二尊寺は瀬高町大竹にある妙心寺派の寺

仏勅寺は二尊寺の末寺で瀬高町唐尾

第2章　火の玉伝説

『旧柳川藩志』や『南筑明覧』によると、飛形山観音堂は昔時は山上にあり。近年今の地に移す。古跡であるけれども、兵乱の時古文書など悉（ことごと）く焼失すという。本尊は大唐日羅（にちら）作なり。後で別に本尊を彫刻して古仏を胸中に納むと。

古老の伝えによると、毎年山下の手継淵（てつぎぶち）より火が出て当山絶頂に到る。この淵は、はるか竜宮城まで続き、竜宮城への入り口ともいわれ、毎年その竜宮から飛形山に燈明が献上され、飛形山頂の竜燈が灯された。このことから、竜宮城と飛形山を結ぶ竜燈（火の玉）が飛んでいくという伝説が今に伝えられている。

大光寺は、創建時大伽藍であったが、兵火にかかり、後は大倉谷笹の平という所に僅かに寺跡が残っていた。山田氏の「上妻記」によると、北田、白木、本山、兼松、辺春にかかりたる山にて、大昔には飛形山大光寺という大伽藍があった。現在は、大倉谷笹の平

という所に移る。筑後31番の観音の札所なり。山門郡の二尊寺末也と。

第3章　大光寺の行事

現在の大光寺は、地元をはじめ八女市内や柳川の信者さんのご支援によって、本堂庫裏などきれいに整備されている。

＜ 十一面観世音菩薩 ＞

１　子（ね）の年の御開帳

現在のご本尊、十一面観世音菩薩は秘仏として普段は厨子の奥深くに安置されている。12年毎に（子年）に御開帳をしている。この時は地元だけでなく、遠くは久留米や福岡方面からも参詣がある。

観音さまの御日である17日には、地元の信者さんによる「観音講」が催されていた。

現在は、講員が高齢化したり亡くなられたりして、毎月の講は休止状態である。

＜ ２０２０年に行われた御開帳 ＞

2　初観音

1月17日には、初観音として今でも続いている。大光寺は筑後第31番の観音札所であり時々にはご朱印を求める方が訪れる。特に春秋の彼岸には参詣者が多い。

3　盆供養と観音祭り

8月17日には、盆供養を兼ねた観音講を勤め夕方からは「観音まつり」を開催している。カラオケ大会や太鼓の演奏・ダンス・マジックからプロの演奏家などを招き盛大に行っている。会場では、お酒類や焼きそばなどを振る舞い盛大に盛り上る。

残念ながら、新型コロナウイルス感染症が流行ってからは行事も縮小し、飲食も中止となっている。

大光寺の整備掃除などは、ボランティアを主にして年末やお盆まえ、また御開帳などにもご協力をいただいている。

< 観音祭り竹灯篭 >

< 観音祭り会場 >

< 三線ロビンズによる沖縄民謡 >

< バナナのたたき売り >

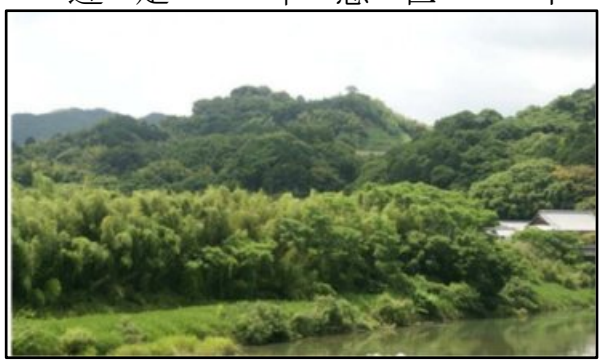
山下城の歴史と城址の保護活動

第1章　上蒲池氏の起こりから終焉まで

1　上蒲池氏（山下城主）の起こり

「立花町史年表」によると、永正年中（１５０４年～１５２０年）「蒲池城主蒲池治久、大友氏の命を受け、２男親廣(ちかひろ)を上妻郡の抑えとして、山下に館所を構えさせる。」

また、「親廣の相談役として３男久盛（矢加部）に川瀬村（広川町）に城を構えて居住させる。」と。これが山下城の始まりと伝えられている。これにより北山の地も戦国乱世を生き抜いた武士たちの一所懸命な姿が、これより約１００年近く続き、天正15年（１５８７年）豊臣秀吉による九州平定によってようやく平和な世を迎えることができる。



＜ 山下城址の遠景 ＞

2　山下城をとりまく周辺の情勢

守護大名の力が

１５３０年頃の筑後地方は、周防（山口）の大内氏、豊後（大分）の大友氏、肥前（佐賀）の少弐氏、肥後（熊本）の菊池氏、薩摩（鹿児島）の島津氏など有力な勢力の狭間（はざま）にあったが、筑後国守護大友氏の支配下にあり、大友氏の庇護のもとに平和が保たれていた。

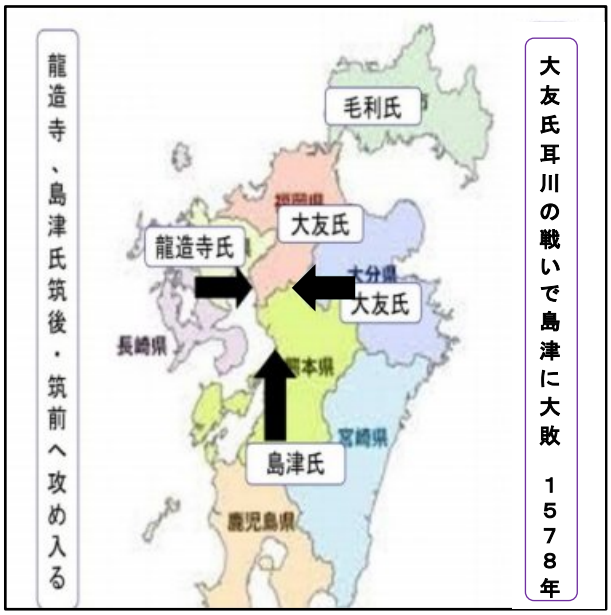
北部地方は大内氏、大友氏、少弐氏が戦いを繰り返し、大内氏は大友氏の隙を狙い、筑後にまで勢力を伸ばそうとしていた。大永５年（１５２５年）には、大内氏の家臣陶美作守(すえみまさかのかみ)と通じた筑後の一部の武将が大友義鑑(よしあき)に叛き、光友の原島付近で戦い、大友勢が勝利している。五條、黒木、問註所、星野忠親、谷川新三郎、蒲池鑑久（あきひさ）などが大友勢として戦っている。この戦いを「杜の林（もりのはやし）の戦い」という。記念碑が立花小学校の裏にある。

戦国大名の力が

１５６０年頃になると、肥後の菊池氏が滅び、肥前では少弐氏に代わって龍造寺氏、周防では大内氏に代わって毛利氏が力を持ってくる。

九州北部地方は、東・北の大友氏、西の龍造寺氏、勢力を拡大してきた南の島津氏の三氏鼎立（ていりつ）の時代へ入っていくことになる。当主はそれぞれ大友義鎮（宗麟）、龍造寺隆信、島津義久である。

＜ １５３０年頃の勢力図 ＞



＜ １５７０年頃の勢力図 ＞

３　筑後国守護職大友氏の支配

①　筑後国守護大友氏

大友氏は、鎌倉時代以降一貫して豊後国守護職を襲封しながら、筑後国にも着々と地盤を固めていき、１５世紀後半からは筑後国守護職も襲封してきた。

蒲池氏は山門郡蒲池村の城主で、大友氏の支配下であり、筑後諸将の中で最大の勢力であった。筑後の支配を盤石なものにしたい大友氏は、蒲池氏の更なる勢力拡大を恐れ分割を命じる。

先に述べたように蒲池城主蒲池治久の２男親廣を山下に、３男久盛を川瀬に、長男鑑久を蒲池に分割される。

山下城は初代親廣の嗣子（ししし）鑑廣（あきひろ）が築き、人見城・笹城（ささじょう）とも称し、鑑久の嗣子鑑盛は、柳

川に新城を構え、山下を上蒲池、柳川を下蒲池と言うようになる。

② 耳川の戦い

天正６年（１５７８年）10月島津氏との日向「耳川の戦い」で大敗すると、今まで穏やかで平和であった筑後も、我が故郷北山の地も龍造寺氏の侵攻、島津氏の北上で戦乱の嵐の中に翻弄されるようになる。そうした中にも、山下の上蒲池氏は終始大友氏に従い忠義を貫こうとする。柳川城主蒲池鑑盛は、戦死する。

4　龍造寺氏の筑後侵攻

① 龍造寺に降らない筑後の諸将

耳川での大友氏の大敗後、肥前の龍造寺隆信は同年11月早速、筑後への侵攻を始める。

大友勢の混乱、弱体化の隙をついた龍造寺勢の素早い対応は、今まで大友氏の庇護のもとにあった筑後の諸将の心を大きく揺さぶり、お家の存続に関わる一大事に、大半の諸将は大友氏側から龍造寺氏側に降る。

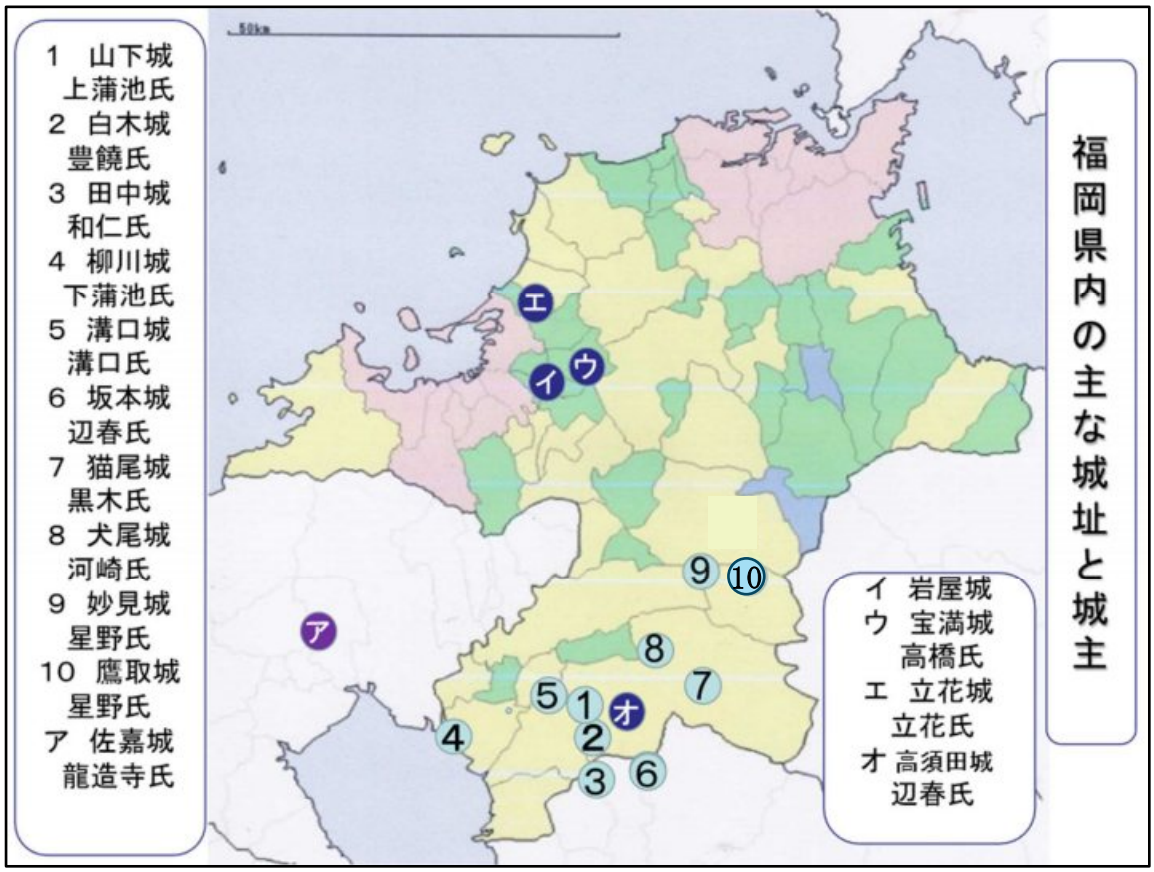
しかし、辺春氏や山下の蒲池鑑廣をはじめ黒木氏・三池氏は、龍造寺に降るを良しとせず拒否し、大友側として龍造寺勢力に対峙する。

天正７年（１５７９年）早速龍造寺勢は、降らない辺春氏の坂本城（旧三加和町）、上蒲池氏の山下城、和仁氏の田中城（旧三加和町）、豊饒（ぶにょう）氏の白木城（白木）、河崎氏の犬尾城（山内）、さらに黒木氏の猫尾城（黒木）を攻撃する。

② 龍造寺勢の勢いに人質を出して降伏

山下城の蒲池鑑廣も、４月から８か月間の籠城戦の末に、大友氏からの援兵の望みもなく、２男鎮行を人質に降伏する。鑑廣には３人の男の子がいた。嗣子である長子鎮運（しげかず）、２男鎮行、３男鎮種である。

尚、下蒲池の柳川城主蒲池鎮漣（しげなみ）は天正８年（１５８０年）５月、佐嘉（佐賀）で龍造寺隆信に謀殺される。



同年８月、山下城主蒲池鑑廣は城中にて没する。お墓は山下の後藤氏宅の裏にある。もともと、ここは麟休寺というお寺だったという。麟休とは鑑廣の法名と言われている。

また、天正10年（１５８２年）２月、猫尾城主の黒木家永は嫡子四郎を人質に降伏し、３月には、辺春氏も攻められ降伏する。

大友氏旗下にあった筑後の諸将のほとんどが、龍造寺氏に降る。大友氏への忠義を貫いてきた山下城主の蒲池鎮運も、龍造寺氏勢として黒木城攻略に従軍を余儀なくされる。

＜ 蒲池鑑廣の墓 ＞

③ 大友氏による龍造寺氏からの筑後奪還

天正12年（１５８４年）３月、島津と有馬の連合勢は島原で龍造寺勢と激突し、龍造寺隆信は討ち死にする。隆信の死後は、弟の政家や家臣の鍋島信生（直茂）が継ぐ。

大友氏は、天正12年（１５８４年）７月、龍造寺勢力下になった筑後奪還のために、龍造寺に降った黒木氏を攻め、戸次道雪（立花）や高橋紹運までも来援し、黒木家永は自刃して落城する。その後柳川城（龍造寺氏）も攻めるが、この時山下城主蒲池鎮運（しげかず）は、進んで城を開き龍造寺勢を防ぐために近郷の11ヵ所に、出張りの城を構えた。

それに反発して、天正13年（１５８５年）５月龍造寺勢も筑後に出陣し、諸将に圧力をかけ、出張り城の１つである知徳城（広川町）を攻めている。

５　島津氏の筑後・筑前侵攻

天正14年（１５８６年）６月、島津の大軍が筑後へ入り、その時、大友方となっていた山下城にも押し寄せ、その後は広川谷の諸城を落とす。その後大宰府の岩屋城（城主高橋紹運）を攻め、７月27日、半月の籠城戦の末岩屋城は全員玉砕する。その後、島津勢は立花城を目指す。８月豊臣秀吉の先遣隊として黒田孝高らが九州に入ると、立花城を取り囲んでいた島津勢は一斉に本国めがけて退却する。

天正15年（１５８７年）正月、龍造寺の軍勢が山下城を襲い、城下を焼き払っている。

同年３月になると、豊臣秀吉が25万の軍勢で九州に入って来て２手に分かれて進軍する。

５月、島津義久は、川内の秀吉の本陣へ出向いて降伏する。これにより九州平定が終わり、長い間続いた戦乱の世はようやく終了し、平和な世が始まる。

6　豊臣秀吉の九州平定と新しい国割

豊臣秀吉は、筥崎宮の陣営で１５８７年６月、九州の新しい国割を行う。

- 小早川隆景（名島城）　７２万石
- 小早川（毛利）秀包（久留米城）３万５千石
- 立花統虎（柳川城）　１３万石
- 筑紫広門（山下城）　１万８千石
- 高橋統増（江ノ浦城）　１万８千石

この他、旧城主の仕置は次のようになっている。

- ✧ 蒲池鎮運、　立花統虎（柳川城主）の与力
- ✧ 五條重定、　筑紫広門（山下城主）の与力
- ✧ 三池鎮実、　立花統虎（柳川城主）の与力
- ✧ 問註所統景、立花統虎（柳川城主）の家臣
- ✧ 黒木延実、　小早川隆景（名島城主）の家臣
- ✧ 草野家清、　南関で誅殺されるが子が鍋島家（佐賀城主）に仕官
- ✧ 星野長虎、　鎮胤の子で龍造寺政家（佐賀城主）にお預け

7　上蒲池家（旧山下城主家）のその後

豊臣秀吉によって領地を没収された蒲池鎮運（しげかず）・鎮行は立花統虎（宗茂）の家臣として文禄の役に従軍し朝鮮半島へも出陣、兄の鎮運は病死する。本来は嫡子の吉廣が継ぐはずだが、弟の鎮行が兄鎮運の妻を娶り跡を継ぐ形となる。

関ヶ原の戦いで西軍として戦い、敗れた立花宗茂は浪人となり、鎮行・吉廣（鎮運の嫡子）ももちろん浪人となり、加藤家預かりとなるが、鎮行は細川家へ、吉廣は加藤家を出奔し、一時山下に帰住するが長い浪人生活の後、黒田家に仕える。

細川・黒田両家には戦国時代以降の古文書と家譜・系図が伝わっている。

３男の鎮種については次にのべる。

第2章　笑月山智願寺の起こり

1　『立花町史』より

智願寺について、「天正13年（1585年）3月山下城主蒲池鎮漣（しげなみ）の嫡子源十郎が剃髪して教意と名乗り、京都の東福寺において修行後、北田村上ノ原に悲願院という一宇を建立した。開基時は「天台宗」ともいう。慶長10年（1605年）四代慶順の代、改宗して山下に智願寺を創建した。」等と記している。

また堂宇の場所についても、「北山村史」をよりどころに「初め樋ノ口にあり、それより茶臼塚に移り、現在地に建立す。」や悲願院の跡を鵜塚（とうつか）と称することなどを記している。

2　智願寺の由来

「智願寺ノ由来」の石碑建立以前に、釈宗重住職によって「智願寺の縁起」がまとめられている。

それによると「智願寺は天正13年（1585年）後陽成天皇の御代釈教意（俗名蒲池源十郎　鎮漣の嫡子）によって開基される。」としている。先の『立花町史』にもそのことが表れている。

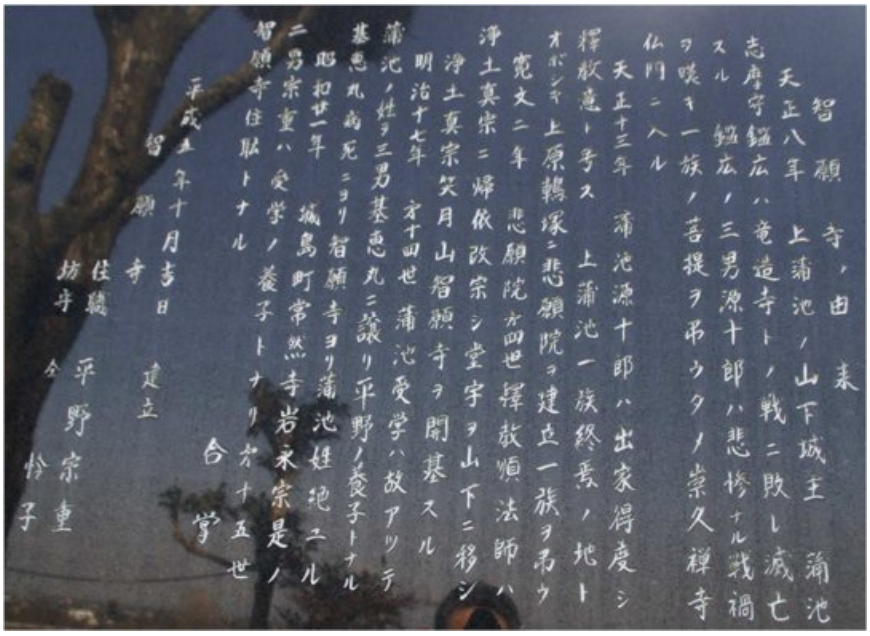
しかし、平成5年に智願寺境内に建立された「智願寺ノ由来」には、次のように記載されている。

＜ 智願寺の梵鐘と石碑 ＞

「天正八年　上蒲池ノ山下城主　蒲池志摩守鑑広ハ龍造寺トノ戦ニ敗シ滅亡スル　鑑広ノ三男源十郎ハ悲惨ナル戦禍ヲ嘆キ一族ノ菩提ヲ弔ウタメ宗久禅寺仏門ニ入ル　天正十三年　蒲池源十郎ハ出家得度シ釋教意ト号ス
・・・・上原鵜塚ニ悲願院ヲ建立・・・・」

『立花町史』によると蒲池鑑廣には３人の息子があり、長男鎮運、２男鎮行、３男鎮種である。

智願寺の石碑に刻まれている由来によると、鎮運は上蒲池家の３代目の山下城主、鎮行は龍造寺に人質となった弟、鎮種は智願寺（悲願院）の開基の源十郎と考えられる。


智願寺ノ由来

天正八年　上蒲池ノ山下城主　蒲池志摩守鑑広ハ竜造寺トノ戦ニ敗シ滅亡スル　鑑広ノ三男源十郎ハ悲惨ナル戦禍ヲ嘆キ一族ノ菩提ヲ弔ウタメ崇久禅寺仏門ニ入ル

天正十三年　蒲池源十郎ハ出家得度シ釋教意ト号ス　上蒲池一族終焉ノ地トオボシキ上原鶴塚ニ悲願院ヲ建立一族ヲ弔ウ

寛文二年　悲願院ガ四世釋教順法師ハ浄土真宗ニ帰依改宗シ堂宇ヲ山下ニ移シ浄土真宗矢月山智願寺ヲ開基スル

明治十七年　オ十四世　蒲池受学ハ故アリテ蒲池ノ姓ヲ三男基恵丸ニ譲リ平野ノ養子トナル

基恵丸病死ニヨリ智願寺ヨリ蒲池姓絶エル

昭和廿一年　城島町常然寺岩永宗是ノ二男宗重ハ受学ノ養子トナリ第十五世智願寺住職トナル

平成五年十月吉日　智願寺　建立

住職　平野宗重
坊守　〃　玲子

合掌

〈 石碑（智願寺ノ由来）〉

山下城主（上蒲池家）の系図

- 治久（蒲池城主）
  - 長男：鑑久（蒲池城主）
    - 鑑盛（柳川城を築く／耳川の戦いで戦死）
      - 鎮漣（龍蔵寺に謀殺される）
  - 二男：親廣（山下城主）
    - 鑑廣（山下城を築く）
      - 鎮運（朝鮮で病死）
        - 吉廣
      - 鎮行（人質となる）
      - 鎮種（智願寺を創建）
  - 三男：久盛（川瀬館主／矢加部となる）
    - 鑑典
      - 国廣

第3章　本城　山下城

1　山下城址の遠望

山下城址は、西原の納骨堂付近より西北西を眺めると前方後円墳のように見える。

ここより目を右に向けると、国見山がでんと座っている。これが後に詳しく述べる山下城の斥候（せっこう）城の国見岳城址である。

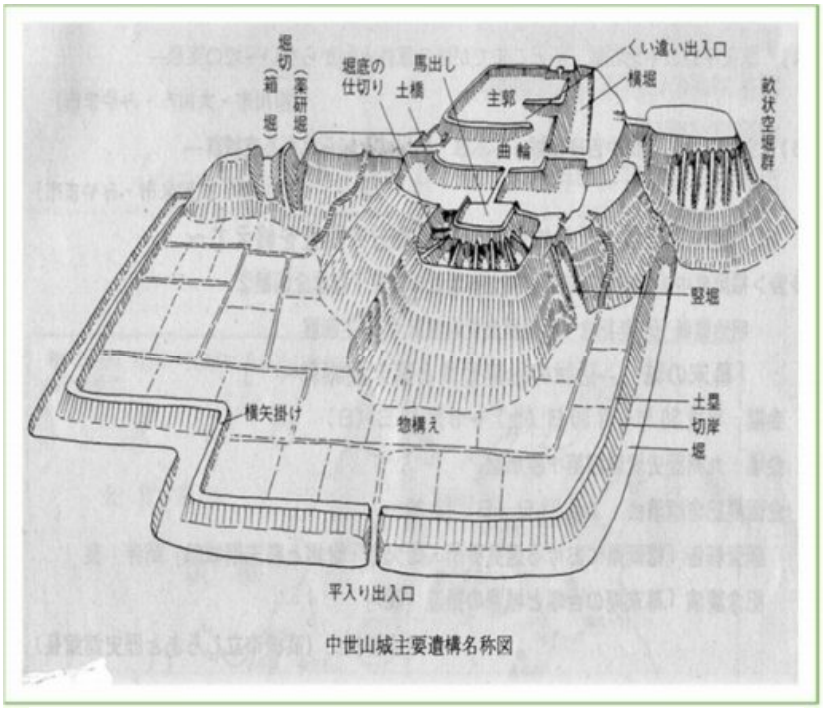
次の遠景は矢原付近から矢部川越しに、南西方向の眺望である。手前は山下の排水機場であり、中央の一番高い所が、城の主郭である。ここでも前方後円墳のような形に見える。現在、説明板を設置し、毎年1月末の土曜日に、眺望を確保する活動をしている。さすがに西はみやま市から東は黒木町まで見渡せる。

＜ 西原より山下城址を望む ＞

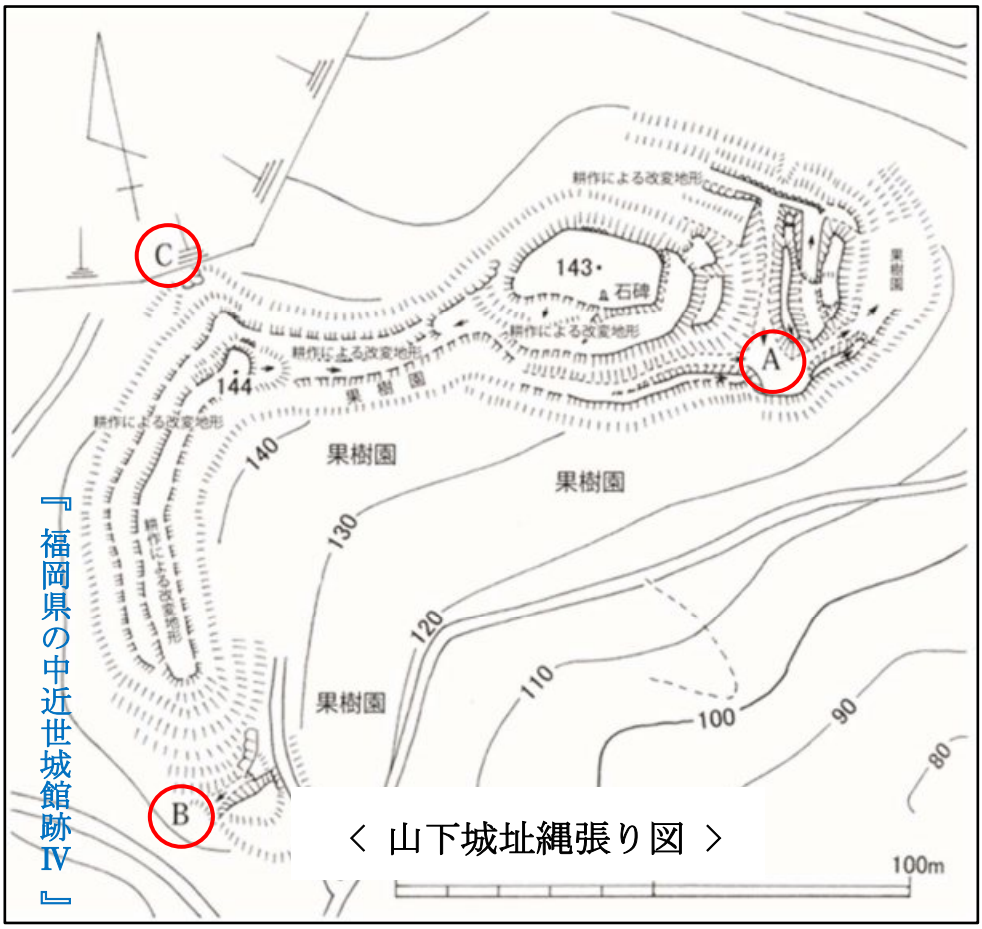
＜ 矢原より山下城址を望む ＞

2　山下城の防御

主郭、曲輪（くるわ）、土塁（どるい）堀切（ほりきり）、畝状空堀（うねじょうからぼり）、横堀、竪堀などが工夫されている。自然の小高い山や突き出した尾根の先端の形状をうまく利用しながら、防御のためのお城（山城）を築いている。左に示すのは、福岡県教育委員会作製の山下城址の縄張り図である。



＜ 当時の山城主要遺構名称図 ＞



＜ 山下城址縄張り図 ＞

『福岡県の中近世城館跡Ⅳ』

残念ながら本丸（主郭）部分だけが、辛うじて残存していることが分かる。主郭の東の斜面には遺構らしきものが確認できる。縄張り図のＡ、Ｂ、Ｃ地点について、県教育委員会は次のように説明している。

縄張り図のＡＢＣ地点の説明

・A地点　曲輪からの落差10m、深さ2～3mの堀切2本が構築され、城館遺構であることが認識できるものの、堀切の北側には新しい時期の山道造成などもなされており、後世の改変がなされていることが分かる。さらに山頂部背後の尾根上及びその周囲は後世の果樹園、畑地の造成により、その段造成が延々と続いていて、ここが本当に城館かどうか躊躇するような状態である。144mの頂部に石垣も見られるが、新しく、平坦面の形状も明らかに城館としては似つかわしくない形状を呈している。

・B地点　尾根の最先端には、堀切とみられる掘り込みなどもあり、ここまでが城域ではないかと想定できる。

・C地点　現在北側は最近の大規模開発により破壊されているが、「福岡県の城郭」に掲載された図面には堀切の表記がなされている。現在堀切の痕跡は確認できないが、もし、図面の通りに堀切が存在していたならば、城館遺構がそこに存在していたことになろう。

当城は大々的に改変が加えられており、詳細な構造を知ることはできない。残された城館遺構から、東西150m南北100m程度の規模が想定される。

＜横堀・土塁の様子＞

＜堀切の様子＞

＜堀切に続く横堀・土塁では？＞

＜A 地点の堀切、この右にもう１本＞

左の写真はＢ地点の堀切の様子である。右は西側下の道路から、左はミカン畑からの写真である。当時の様子が偲ばれる。

＜　Ｂ地点の堀切　＞

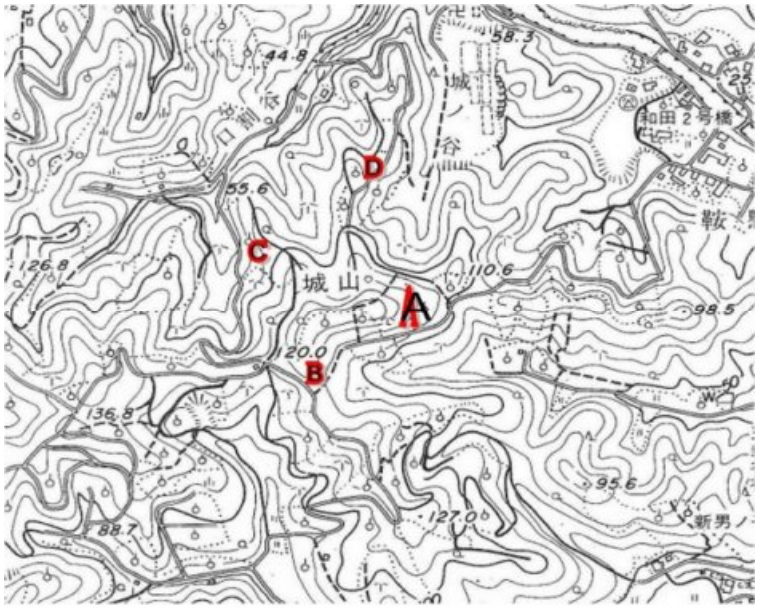
左の写真はＢ地点からの主郭（本丸）の様子である。

＜Ｂ地点から主郭（本丸）の様子＞

次の地形図は、大規模開発以前のものである。Ａ、Ｂ、Ｃ地点は前の縄張り図のＡ・Ｂ・Ｃと同じ地点である。

この地形図をよく見るとＡ地点から北東へ、Ｂ地点から南へ、Ｃ地点から北北西へ、Ｄ地点から北へ尾根が延びていたことが分かる。

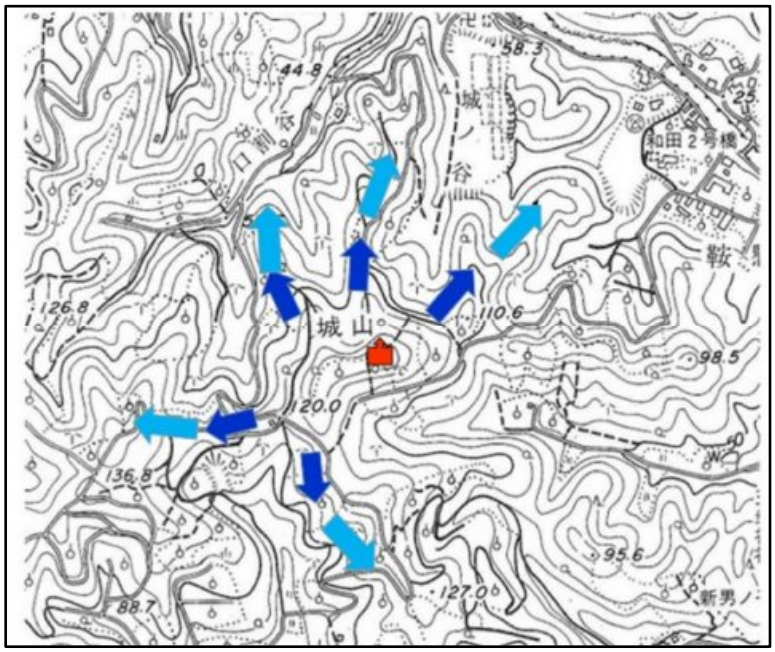
先にも述べた通りＡ・Ｂ・Ｃ地点には県教育委員会の説明によると堀切が確認されている。



＜　山下城址周辺の地形図　＞

真北に延びる尾根ＤとＣ地点から北西方向へ延びる尾根は現在大規模開発によって消滅している。

残りの尾根Ａ地点から北北東へ、Ｂ地点から南へ、また、西へ延びる尾根は残存している。これら残存している尾根や斜面に防御の備えが残っていることを願う。



＜ 城山から真北 北東 北西 西 南へ延びる尾根 ＞

次の写真は、大規模開発前の樹木伐採後のＣ・Ｄ地点から延びる尾根の様子である。

上がＣ地点、下がＤ地点である。尾根と尾根の間は深い谷である。尾根上には、堀切や曲輪・馬出し等、谷の斜面には竪堀や畝状空堀などの工夫を凝らした防御の備えが考えられるがミカン園造成や道路設置等のため、遺構として確認できないのは残念である。

＜　Ｃ地点の尾根　＞

＜　Ｄ地点の尾根　＞

３　山下城址北側の樹木伐採後の様子

現在では山下蜜柑団地として開発され、当時を忍ぶすべはないが、ブルドーザーが入る前の山下城址の北側の地形を表す貴重な写真である。

尾根と谷が入り組み「守り安く、攻めにくい」地形をしている。これらの尾根と谷を生かした防御の備えが至る所に施されていたものと考えられる。

＜　Ｃ地点　＞

＜北の谷より山下城址を望む＞

＜北の谷より山下城址を望む＞

＜Ｄ地点から山下城址を望む＞

＜　Ｄ地点の竪堀　＞

４　ブルドーザーにより造成が一気に

高い尾根に深い谷と険しい地形も、一気に広々としたなだらかな土地になった。山下城を必死に守った武士たちもびっくりして目を覚ましたのではないか。

＜ 開発が進むミカン団地 ＞

第４章　国見岳城・鞍懸城

１　国見岳城址の遠望

国見岳城址の南と北からの写真である。『郷土は語る５』によると、このあたりを国見・鞍懸という。城山と深い関係がありそう。１００ｍを少し超えた一孤峰で、俗に国見岳といわれている。

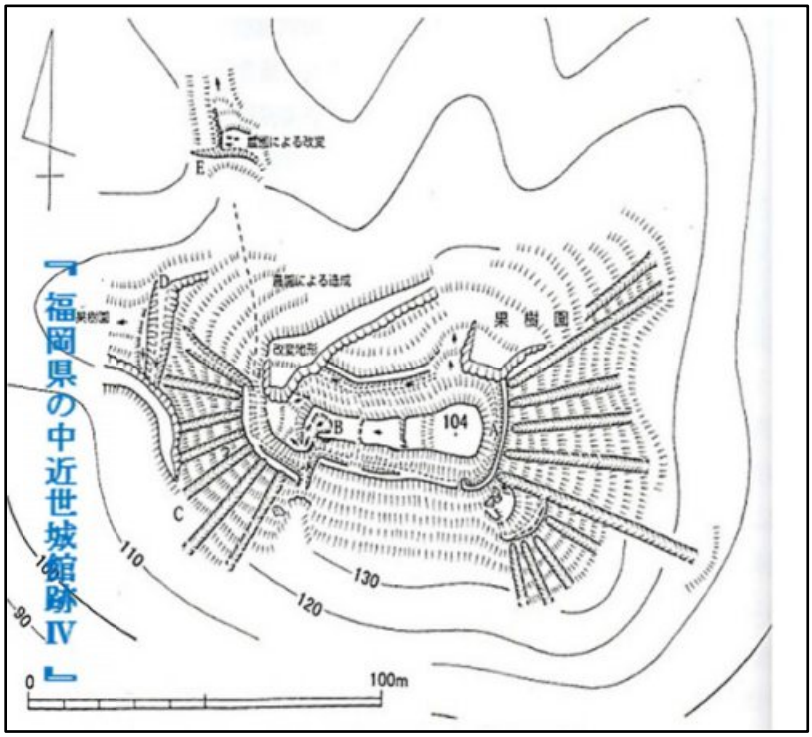
＜ 国見岳城址の遠望　南から ＞

＜ 国見岳城址の遠望　北から＞

けわしい断崖になっていて、一方には白木川が巡っていて、要害の地として、山下城の斥候（物見）城の役を果たしていた。」と記されている。

2　国見岳城の防御

福岡県教育委員会は次のように説明している。



＜ 国見岳城の縄張り図 ＞

1. 標高１０４ｍの頂部に東西約５０ｍ、南北約１５ｍ弱で、曲輪を置き、その周囲に横堀を巡らしている。

2. 曲輪の東側には横堀の斜面下Aに畝状空堀群の竪堀10本を確認できるが、北側斜面全体は果樹園造成により、大々的に破壊されており、元はさらに竪堀があったものと考えられる。曲輪の北側には横堀と土塁が、確認でき、城館遺構の残存が確認できるものの、竪堀は確認できない。

3. 曲輪の最も西側は虎口状の導入路Bがあり、さらに西側に曲輪が続いている。その南西側から西側にかけての斜面Cにも東側斜面同様、畝状空掘群があり、7本の竪堀を確認できる。さらに、西側尾根上Dには深さ約２ｍの堀切1本、北側尾根上Eには果樹園造成によって損壊しているものの、元来堀切であったとみられる落ちが確認できる。厳重な防備の在り方を窺うことができる。

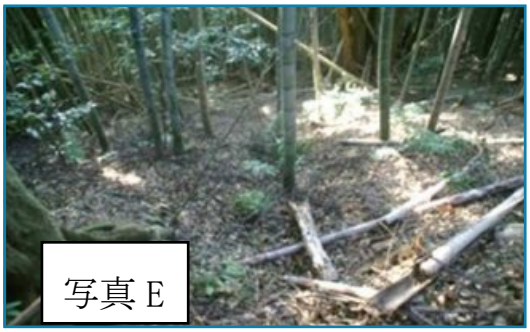
＜　福岡県教育委委員会の説明＞

次の写真は、国見岳城の主郭を取り巻く横堀の様子である。写真Ａは北面の主郭と横堀の様子である。写真Ｂは南面の主郭と横堀の様子を表している。自然地形を台形状に削り、空堀（横堀）・土塁を巡らしている。

写真Ｃ・Ｄは、同じく主郭と空堀（横堀）の様子である。縄張り図からも分かるように、主郭を取り巻くように空堀が巡っている。また、東と西に畝状空堀群が残っている。

写真Ｅ・Ｆ・Ｇは竪堀の様子である。縄張り図にあるように東斜面に10本、西斜面に7本が確認されているが、現在全てを目視で確認することは難しい。小さな城址であるが遺構が確認できる貴重な遺跡である。

写真Ａ


写真Ｅ

写真Ｂ

写真Ｆ

写真Ｃ

写真Ｄ

写真Ｇ

3　鞍懸城址

この写真は、北山通りから南西方向の遠景である。中央が国見岳城址、左が山下城址、右が鞍懸城址といわれている。

鞍懸城址は、国見岳城址の北西側の尾根続きの丘陵に想定され、明瞭な城館遺構はないとされている。

『稿本八女郡史』に、「蒲池家の城跡也。光源水と云う薬水ありて、七夕の水と云いけるが、今は無し此の所に七夕堂あり」と記している。当城は資料が乏しく、詳しいことは分からないが、山下城防備の施設があってもおかしくないところである。

実際に確かめてみると下の写真のような様子である。

＜ 北山通りから南西方向を望む ＞

＜ 主郭の西側の落ち ＞

＜ 主郭の平坦面 ＞

＜ 主郭の北西側の石組 ＞

＜ 主郭の北側の石組 ＞

第5章　山下城址を守り愛する活動

1　山下城址石碑

山下城主郭址に大正7年（1918年）に八女郡連合青年会北山村青年会によって設置された石碑がある。この石碑は貴重な山下城址を、ミカン園造園の嵐から守り抜いた功労者と云える。

一名人見城トモ云イ蒲池
志摩守鑑廣ノ築キシ所
八女郡聯合青年会
北山村青年会
大正七年十月
山下城址

2　山下城址説明板・案内板設置

令和元年度（2019年度）八女市地域づくり提案事業に応募し、説明板と案内板等の設置が承認された。

山下城跡（上蒲池氏の居城で、人見城・笹城ともいわれる。）

永正年間（一五〇四年～一五二一年）に築城されたと伝えられている。

豊後の大友氏の命により、蒲池城主蒲池治久は、次男親広に山下に館所を構えさせ、三男久盛（後に矢加部家を継ぐ）を相談役として川瀬村に館を構えさせたことに始まると伝えられている。

豊後の大友氏の幕下にあったが、大友義鎮（宗麟）が一五七八年（天正六年）日向耳川の戦いで島津に大敗し、それを機会に肥前の龍造寺が筑後に侵攻してくるようになる。

一五七九年（天正七年）二代城主蒲池鑑広は長い龍城戦の末、ついに龍造寺に降伏し、翌年城中にて没する。

三代蒲池鎮運は龍造寺に従うも、島津の侵攻に島津方に通じ、山下城を攻められ、城下を焼き払われる。

戦乱の中一貫して大友氏への忠義を貫いていたが、一五八七年（天正十五年）豊臣秀吉の九州侵攻により、三代続いた上蒲池氏も、ついに山下城を追われ、筑紫広門が入城することになる。

山下城縄張り図

A地点
曲輪からの落差10m，深さ2～3mの堀切2本が構築され，城館遺構であることが認識できる。
堀切の北側には新しい時期の山道や果樹園造成による段造成が続いていて城館遺構かどうか判断できない。144mの頂部に石垣も見られるが城館としては似つかわしくない。

B地点
尾根の最先端には，堀切とみられる掘り込みなどもあり，ここまでが城域ではないかと想定できる。

C地点
現在，北側は大規模開発により消失しているが，「福岡県の城郭」に掲載された図面には堀切の表記がなされている。堀切が存在していたならば，城館遺構がそこに存在していたことになろう。

福岡県の中近世城館跡Ⅳ　筑後地域・総括編より

令和二年二月　北山地区地域振興会議

＜ 山下城本丸跡（主郭）に設置した説明板 ＞

説明板や案内板は、内容・デザインの検討を重ね、令和２年（２０２０年）２月に北山地区地域振興会議の役員によって設置された。左の写真は、山下城本丸跡や男ノ子荘厳院前、及び鞍懸公民館下広場に、設置している様子である。

山下城址への登り口として現在は３通りある。

① 山下の蜜柑団地を抜けて、車で近くまで行ける道

② 鞍懸広場からは、軽トラックで行ける道

③ 男ノ子荘厳院から、歩いて登れる道

いずれも白い道案内標識が途中にあり、容易に本丸跡に行くことが出来る。

＜説明版、案内板の設置の様子＞

＜ 男ノ子荘厳院前及び鞍懸公民館下広場の案内板 ＞

３　山下城址整備作業

説明板や案内板は設置されたが、本丸址は竹藪に覆われ全然見晴らしが効かず、「**竹ば切ろい、そして眺望ばようすい**」の声がたくさん上がった。

「北山よかとこさるこう会」の発起により、「山下城址を愛する会」を立ち上げ、北山地区地域振興会議が後援となる体制が出来た。

＜　整備前の城址本丸跡の様子　＞

＜第１回整備後の城址本丸跡の様子＞

令和３年（２０２１年）１月末土曜日に、第１回「山下城址整備作業ボランティア」を募集し、整備活動が始まった。令和５年１月末で３回目となった。

毎年20数名の応援団があり、整備作業ボランティアが定着しつつある。また、毎年６月中旬には、「北山よかとこさるこう会」主導で、若竹切りを行っている。こうしたボランティア活動によって、眺望の効いた山下城址へと、少しずつ変わっている。

ここに立ってみると、２代目城主蒲池鑑廣がここに築城した思いや考えが分かる。

令和５年（２０２３年）１月の３回目の整備作業では、桜の木10本、お多福南天20本を植樹した。春には桜が満開となり、秋にはお多福南天が真っ赤に染まることであろう。

北山地区の皆さん、ボランティアの皆さん今後とも応援宜しくお願い致します。

第1回整備作業
集合写真

第2回整備作業
集合写真

第3回整備作業
集合写真

＜ 本丸跡の様子 2023 年１月２８日 ＞

＜ 本丸跡から八女市街の眺望 ＞

男ノ子焼（おのこやき）

第1章　男ノ子焼の起源

男ノ子焼とは、16世紀末に現在の八女市立花町北山（男ノ子）で約80年間焼かれていた陶磁器である。

豊臣秀吉が文禄元年（1592年）より行った文禄の役、慶長2年（1597年）より行った慶長の役の後、九州の諸大名は朝鮮半島から陶工を伴い領内で陶磁器を焼かせた。現代まで引き継がれている有名な陶芸の産地は次のようなものがある。

- ✧ 細川忠興　上野焼　田川郡赤池町
- ✧ 黒田長政　筑前高取焼　福岡市
- ✧ 鍋島直茂　肥前有田焼　有田市
- ✧ 島津義弘　薩摩焼　鹿児島市
- ✧ 毛利輝元　長門萩焼　山口県萩市

旧八女郡でも、笠原村[釈形焼]、串毛村[鹿子生焼]星野村[星野焼・十籠焼]、他にも、水田村[水田焼・蒲池焼]、筑後市の[赤坂焼]や広川町の[川瀬焼]等がある。

柳川城主立花宗茂公は慶長の役の後、慶長3年（1598年）12月、朝鮮の新羅より伴った陶工を三潴郡濱口村（大川市小保）において窯を築かせ陶器を焼かせた。このため居住地の濱口村にちなんで濱口姓を名乗った。間もなく製陶材料が乏しいため立花町北山男ノ子（上妻郡北田村雄山 ※「北山村史」にこの地名がある。）に居を移し、立花藩御用窯として製陶に従事した。これが男ノ子焼の始まりといわれている。

＜男ノ子焼前期の作＞

＜男ノ子焼の書＞

陶工は濱口六左衛門と云う。（舎弟は、肥後の国正臺山（小岱山）に住んだと言われている。）

第2章　男ノ子焼の特徴とその終焉

現存する男ノ子焼は、茶壷、茶甕（ちゃかめ）、茶碗等であり、いずれも湿気を防ぎ、香気が変わらぬことで評価されている。釉薬（ゆうやく）は上部にうっすらとかかったものが多いが、中には黒字の上に黄釉（おうゆう）の流しのかかった鮮やかなものもあり、焼は固い。形は肩張りの男型といわれるものが多く、作り方としては、粘土を紐状（ひもじょう）にして形を作った後、ろくろで形成したものや、茶甕になると上下をそれぞれ形成し後でつなぎ合わせた作りのものもある。

また、肩の部分に耳と呼ばれる突起が通常は４つ付いていて、その耳に紐を通し馬等で運搬しやすいようになっているのに対し、男ノ子焼は耳が３つのものが多い。これは床の間飾りと言って観賞を意識したものであると言える。

男ノ子の集落には、小字名が窯床（かまどこ）・瓶焼（びんやき）という場所がある。「かまどこ」は男ノ子玉垂神社正面の小高い藪に覆われた場所で、北側の斜面には登り窯の跡が見られ遺構が現存する。周辺より磁器の破片や磁器を焼く道具等が多数出土していることから、ここでは殿様に献上するための磁器が焼かれていたと推測される。

＜男ノ子焼中期の作１＞

＜男ノ子焼中期の作２＞

＜男ノ子焼後期の作＞

また、この場所は昔から「荒神藪」と呼ばれ鎌入れ等を避けてきた場所でもある。

「びんやき」は現在の「男ノ子焼の里」が建っているあたりである。ここは、陶器を主に生産していたと推測される。他にも、白岩、砥石場、崩竈（くえがま）二竈口（ふたかまくち）等の地名があると文献には残っている。（詳細不明）

男ノ子焼の窯元は、柳川藩主立花鑑虎（あきとら）公の時代に途絶えたと言われている。言い伝えによれば、３代目濱口六左衛門は、殿様より鶴の製陶を命ぜられ献上したところ、その鶴に目が入っていなかったことに殿様大いに憤り、「今後生かしておけばいかなる事態が起きかねん 国に永居無用」となり、肥後ノ国正臺山（小岱山）の麓（玉名郡宮ノ尾）に移り住んだとされている。

英山公（立花鑑虎）は元禄９年（１６９６年）に隠居していることから、男ノ子焼が焼かれていたのは７０～８０年間だと考えられる。こうして男ノ子焼は歴史の上から姿を消したのである。

＜　玉垂神社から望む荒神藪　＞

第３章　男ノ子焼の再興（男ノ子焼の里）

昭和63年（１９８８年）から始まった「ふるさと創生事業」を受け、立花町では平成元年（１９８９年）度から平成２年（１９９０年）度にかけて、まちづくり事業の一環として「男ノ子焼の里」と呼ばれる陶芸の家を建築した。昔をほうふつさせる里山の雰囲気を残す、谷間の小さな集落に立てられた「男ノ子焼の里」は、文化的・伝統的建築様式である茅葺き工法を用い、日本の原風景と重なった重厚で優美な姿を誇っている。

〈男ノ子焼の里モチーフ〉

〈 駐車場にある案内板 〉

素朴さと古雅さに魅せられて（案内板より）

筑後には忘れ去るには惜しい古窯があります。その代表的なものが、筑後史上最も古い窯とされる男ノ子焼です。

男ノ子焼は約４００年前、柳川藩主・立花宗茂が朝鮮半島より連れ帰った陶工によって始められました。以後80年間、柳川藩主の御用窯として栄えましたが、熊本県の小岱山の麓に窯を移したため、途絶えたと伝えられています。

その男ノ子焼の再興を目的に建設した施設が「男ノ子焼の里」です。その佇まいは緑豊かな男ノ子の地にふさわしく、重厚で優美。伝統的な建築様式である茅葺の在来工法で建てられ、立花の自然と美しく調和しています。

男ノ子焼の里全景

男ノ子焼の里 HP

第4章　男ノ子焼の里保存会

「男ノ子焼の里」の活動を支えているのが、「男ノ子焼の里保存会」である。

この団体は、北山地区地域振興会議のメンバー及び一般会員で組織され、初代会長近見泰治氏を中心に、献身的に活動を行ってきた。

陶芸作家を招致し、文化資産の復興、町内外の交流の場を提供している。また、施設管理・清掃活動等を行っている。陶芸家には、小鹿田（おんた）焼の流れをくむ柳屋栄氏（当時31歳）を招聘（しょうへい）し、男ノ子焼の再現に挑むとともに、新たな作品作りに取り組んできた。

これまで、柳屋栄氏・野田誓也氏・杉田貴亮氏３名の陶芸家が関わってきた。現在は、柳屋栄氏・服部高好氏（北山出身・常滑焼で活躍）が陶芸活動を行っている。

４月には「れんげ祭り（男ノ子焼の里まつり）」を開催し、地域おこしの大きなイベントとなっている。

令和５年（２０２３年）より母屋をゲストハウスに改修し、四季折々の里山の自然を楽しめる施設として活動を行っている。

＜ 男ノ子焼の展示販売場 ＞

＜ 毎年行われる「れんげ祭り」の様子＞

＜ 四季折々の姿を見せる男ノ子焼の里 ＞

第5章　地名と周辺の史跡等

1　男ノ子の地名

男ノ子という地名は全国でもここ1か所である。地名の由来は定かではないが、みやま市の女山（ぞやま）に対応する地名であるという記述もある。

また、『日本書紀』に登場する田油津媛（たぶらつひめ）は山門県（やまとのあがた）現・みやま市瀬高町を中心に勢力を持つ女王で、その兄夏羽（なつは）は男子山に住んでいたのではないかという説もある。

さらには、『誰にも書けなかった邪馬台国』（村山健治著）には、宮殿に使える女官が女児を出産すれば宮殿で育て、男児を出産すれば男ノ子に行き住民の誰かに引き取ってもらったのではないかという仮説が見受けられる。

いずれにしろ、ロマンあふれる地名である。

2　男ノ子不動の滝

男ノ子川の上流に龍ノ迫（たつのさこ）という谷があり、そこに5ｍほどの小さな滝がある。滝の側に、不動明王、弘法大師、十三仏がまつられている。

明治末期弘法大師の信仰が各地で盛んになり、この地でも地蔵菩薩堂を札所としたが、その後廃止された。

※ 修行大師とは、修行時代の弘法大師のこと

＜ 不動明王と修行大師 ＞

大正12年（１９２３年）関東大震災の年、井上三太郎氏より、弘法大師設置の願いが出され協議の上、弘法大師を安置するとともに、不動明王大小２体を滝の左右に安置し不動の滝と命名した。その後、十三仏が設置され入魂式等が大正13年（１９２４年）に行われた。近年でも、滝行を行う人や参拝する人も多く、毎年彼岸には村内で清掃活動が行われている。令和２年（２０２０年）に村内外の寄付により東屋が立てられ憩いの場にもなっている。

＜ 寄付で建てられた東屋 ＞

＜　十三仏　＞

＜　不動明王２体　＞

３　その他の史跡（玉垂神社・日清橋）

✧ **玉垂神社**は、天保12年（１８４１年）に創建された神社である。

詳細は、71ページ「北山地区の神社」参照

✧ **日清橋**は、日清戦争の頃架橋された石橋である。

詳細は、93ページ「②男ノ子眼鏡橋」参照

４　荘厳院（真言宗・仏師工房）

宗派　　真言宗九州教団

御本尊　大日如来

本山　　東長密寺（空海が中国より帰国して最初に建てた密教寺院　九州八十八ケ所百八霊場一番寺）

＜ 男ノ子にある荘厳院 ＞

＜ 西田法雲氏 ＞

＜ 仏師西田法雲 HP ＞

荘厳院（しょうごんいん）はオウム真理教事件を機に宗教法人法が厳しくなり、開山から20年後の令和５年（２０２３年）に福岡県の宗教法人と認められた男ノ子にある真言宗のお寺である。

荘厳院は、全国の寺社仏閣のご本尊や仏像を多数彫ってこられた仏師で僧侶の西田法雲氏の工房（仏像彫刻所）でもある。西田氏は、地元より全国的に有名な仏師である。

【仏師　西田法雲】

福岡市美術館や熊日画廊、九州芸文館などでも個展を開かれている。八女市文化財専門委員も務められていた。彫られた仏は、１４２０体（２０２３年10月現在）ほどになっている。納められた寺や仏像の写真は、『仏師西田法雲のホームページ』を参照。

昭和62年（１９８７年）に八女へ移住、福岡大仏造仏の為義父の世話になる。義父は八女市乳児院長までやられた方で、部下に郷土史家の江下淳さんがおられる。

法雲氏に仏像彫刻を習っている人の中から全国生涯学習大会で金賞を受賞された熊本の長谷さん、西部工芸展截金の飯塚の白間さん、博多人形の登竜門である与一賞に輝いた佐賀県三養基町の青木さんなどが出ている。

平成15年（２００３年）４月には、ノーベル生理学賞を平成12年（２０００年）に受賞された米国の神経科学者 ポール・グリーンガードさんが、木彫の見学に訪問されている。平成27年（２０１５年）には、フランス２チャンネルも取材に来ている。海外からの見学者もある仏師工房である。

これからは、「仏像彫刻の資料館」としても公開して行きたいとのこと。

＜ 男ノ子大仏 ＞

荘厳院にある男ノ子大仏（十一面観世音菩薩）は平成23年（２０１１年）の東日本大震災より彫り始め、７回忌の平成29年（２０１７年）３月10日に開眼法要を行っている。
１丈６尺（約4.8ｍ）の仏像である。

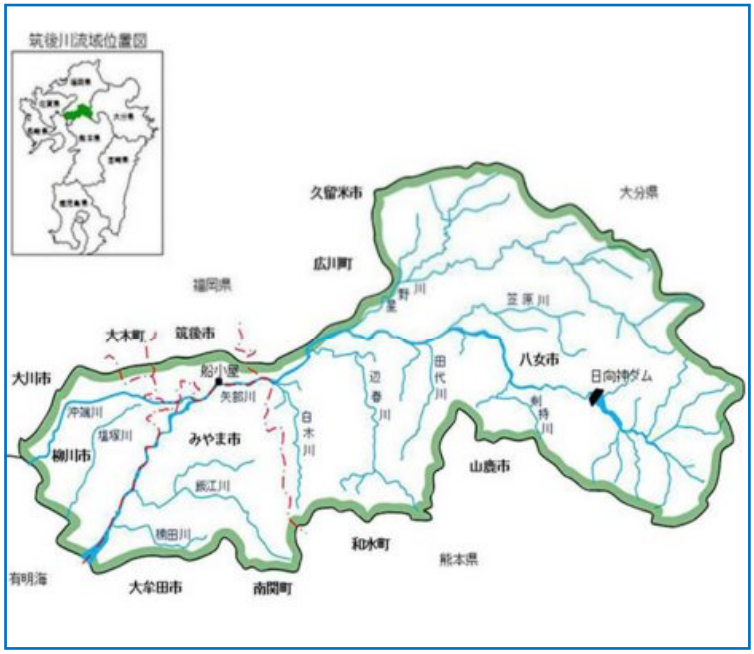
千間土居

第1章　矢部川

矢部川は、県下最大の穀倉地帯を潤しながら有明海へと注ぐ清流である。その源を福岡、大分、熊本の３県にまたがる三国山(標高９９４ｍ)に発する矢部川は、日向神峡谷を流下し、中流域において支流星野川を合わせ、さらに辺春川、白木川、飯江川等を合わせながら筑後平野を貫流し、下流域において沖端川を分派して有明海に注ぐ、幹川流路延長61km、流域面積６４７平方kmの福岡県内では、第３位の河川である。

矢部川は福岡県南部に位置し、流域には、八女市、筑後市、みやま市、柳川市といった主要都市を有している。沿川にはＪＲ鹿児島本線、九州縦貫自動車道、国道３号等の基幹交通施設に加え、九州新幹線や有明海沿岸道路があり、交通の要衝として社会・経済・文化の基盤をなしている。また、矢部川の水は古くから日本有数の穀倉地帯である筑後平野の農業用水や発電用水に幅広く利用され、筑後地方における産業活動を支えている。

さらに上流部は矢部川県立自然公園、筑後川県立自然公園等の豊かな自然環境に恵まれ、中流部には国指定天然記念物の「新舟小屋のクスノキ林」や「船小屋のゲンジボタル発生地」、県営「筑後広域公園」などがある。



＜　矢部川の流域図　＞

第2章　千間土居

（『立花町史』上巻より）

矢部川は御境川（おさかいがわ）と称し、柳川・久留米両藩の藩境となっていた。したがって矢部川の治水、利水については両藩の競合状態で一方が護岸（堤防、寄せ石等）を強化すれば、その対岸は洪水の折は水浸しとなり、大きな被害を被り、毎年のように大庄屋、川庄屋を通じて抗議を繰り返す状態であった。時には大勢が繰り出し寄せ石を除去したり、岸辺の竹や樹木を切ったり実力行使による抗議行動も行われている。

千間土居（せんげんどい）とは北山地区曲松（よごまつ）から山下まで約１３００間（約２３００ｍ）の矢部川に沿った堤防で、元禄８年（１６９５年）田尻惣助が普請役（ふしんやく）で地元北田村の農民を中心に夫役（ぶやく）として築かれたものである。

古い矢部川水路の絵図によれば、当時の千間土居には霞堤（かすみてい）と称する箇所があり、洪水のたびにところどころ切断された個所から水が溢れ、田畑は水浸しになり、大雨が終われば直ちに水が引くような構造の堤防であった。田尻惣助がこの千間に及ぶ堤防を築くことにより、北山地区を水害から護り、約70町歩（70ha）の荒田を良田に甦らせた。更に千間土居を補強するため惣助の２男惣馬は堤防に竹や樹木を植え、現在もなお当時の楠木が数10本残り、うっ蒼と繁り町民の憩いの場となっている。

久留米藩では、この千間土居に対応して柳瀬村から矢原村（八女市大字柳瀬、矢原）まで、矢原組大庄屋の甲斐田七郎右衛門に堤防を築かせたが、元禄10年（１６９７年）洪水で決壊し、田畑に大被害がでたので甲斐田七郎右衛門はその責任をとらされ放免（免職）となり、あとは福島町庄屋松延宗兵衛が支配することになった。

北田村、山下村ニ千間土居ヲ築立ラルル時、田尻惣馬ニ命シラレテ築キタリ、
是モ洪水溢来テ水当ヲ試ンカ為、自ラ川ニ入リ流ニ添テ水当ヲ考ヘ千間ノ土居ヲ築立シ由ナリ、
又唐尾村ノ土居、水当強キ故、水除ノハネヲ工夫ヲ以テ 築立シニ崩損ルノ患サラニナシ
天保十三年仲秋上旬
三善庸礼茗「御国家損益本論」

右資料のように千間土居を築いたのは田尻惣馬が通説となっているが、これは「御国家損益本論」あるいは 渡辺村男の『旧柳川藩志』によるもので、元禄８年（１６９５年）には田尻惣馬は18歳で殿様のお供で江戸にいたことが「柳河藩史第四編鑑任記」の惣馬の略歴に記され、後年田尻惣馬によって千間土居は補修強化されたということが正説といえる。

千間土居築造の年月についてはそれぞれの文に異同があり元禄２年（１６８９年）とするもの元禄６年（１６９３年）、元禄８年（１６９５年）と見られるが、大半の文が元禄８年（１６９５年）としている。久留米藩新庄組大庄矢賀部文書、あるいは矢原村川庄屋控等によれば、宝永８年（１７１１年）の柳川藩本郷組、谷川組両大庄屋に宛てた折地大庄屋下川市左衛門他三大庄屋の「境川筋の儀ニ付、御相談申入候覚書」に、「拾七ヶ年以前亥年の洪水にて双方（久留米、柳川両藩）ともに被害多く、同年冬から翌年春にかけて互いに囲普請を行った」ことを述べている。
その際の工事に、所々大土居を築き、水刎（はね）数ヶ所付け、堤防の高さも此方（久留米藩）の土居よりおおよそ５～７尺（約1.6ｍ～2.3ｍ）ほど高くなっていることについての抗議文書である。

第3章　刎（水刎）

刎（はね）は小さなものを含め約８個位見受けられたが、だんだんなくなってきているようである。川は本来、その流れが対岸に跳ね返ってジクザグに蛇行する特性があり、洪水の際は流れが土手に当たるところの被害が大きくなる。そこで、川の流れが土手に当たる付近に石積みをしたり、蛇籠（じゃかご）によって水勢をやわらげたり、水流を反転させたりして、堤防の決壊を防ぐ効果のある刎を造った。

＜ 千間土居の刎 ＞

＜ 刎 築造想像図（後藤秀明氏画） ＞

平成７年（１９９５年）には、千間土居築堤３００年を迎え、立花町によって刎の側に記念碑が建立された。先人の苦労と築堤の偉業を称え、文化遺産として後世に引き継ごうというものだ。御影石研ぎ出しで作られた。

作者は西日本短期大学教授毛利陽出春氏である。

〈 築堤 300 年を記念しての碑 〉

〈千間土居とハネ（水刎）の案内板〉

また、平成７年（１９９５年）８月立花町より千間土居築堤３００年記念として関連資料を取りまとめた**『せんげんどい』**が発刊されている。

〈 平成７年頃の千間土居公園 〉

第4章　田尻惣助、惣馬

田尻家は豊後(大分県)大友氏の家臣で大神（おおが）姓を名乗っていたが、その後田尻河内守鎮春の代に戸次（べっき)道雪に仕えるようになり、その鎮春から6代目が惣助惟貞(これさだ)である。

田尻惣助は元禄5年(1692年)柳川藩より幕府に提出する「御国絵図」を作成し、普諸役となってから英山公（鑑虎（あきとら））の隠居所（現在お花）を普請し、その褒美として元禄5年（1692年）に2男惣馬は書院番として召し出された。

元禄8年（1695年）に北田村曲松（よごまつ）から山下町に至る矢部川に堤防を築いた。この長さ千間余（実際は2300m）あるため「千間土居」と称し、その補修強化をしたのが2男の惣馬惟信である。惣助は元禄13年（1700年）9月、江戸において病死した。

田尻惣馬惟信（これのぶ）は延宝6年（1678）惣助の2男として生まれ、元禄5年（1692）25歳の時書院番となり、元禄8年（1695）千間土居を惣助が築いた折は、藩主のお供で江戸にあった。
（柳河藩史鑑任記）

惣馬は、その後病により元禄14年（1701年）柳川に帰郷し、浪人をしていたが宝永6年（1709年）33歳で普請役に取り立てられ、正徳3年（1713年）黒崎開（三池郡高田町）堤防決壊のため普請方を命ぜられてその修築を行い、更に蒲地山溜池、山門郡山川町の東西260間（約470m）南北100間の大貯水池を修築し、大根川周辺の水田を潤し、大干ばつの折にも田の水が枯れることなく、今なお流域の農民の感謝の元となっている。

また父惣助が築いた千間土居矢部川下流域に護岸工事として刎を設けて水流を変化させ、楠、杉等の樹木や竹を植えて水勢を弱めて堤防を護った。

千間土居の竹藪の管理は、堤防を10区に分け、北田村の各名を割り当て責任を持たせた。

原島地区には今なお惣馬ケ土居の名称が残る等矢部川流域の各所に隠し刎(はね)を築いたり、井堰を設けて回水路工事を行ったり、矢部川流域の治水利水に大いに貢献した。

惣馬の築堤工事の指揮は過酷を極め、「切る時は、木六竹八葦九月、惣馬が首は、今が切りどき」と俗謡され、鬼奉行と恐れられたともいう。

その当時、肥前（佐賀）の成富兵庫、肥後（熊本）の堀平左衛門と共に九州土工の3傑と称せられ、九州各藩の土木事業についての優れた技術と手腕は今日でもその声望を轟かせている。

惣助・惣馬父子の墓碑は、みやま市瀬高町本郷の九品寺にあり、惣馬の碑銘には

「専徳院活山自蓮居士　宝暦十辰天七月十六日」とある。

＜ みやま市歴史資料館より ＞

第5章　現在の千間土居

元禄８年（１６９５年）、矢部川の治水を目的として北山の曲松から山下までの約１３００間（２３００ｍ）に堤防が築かれてから、約３３０年になる。

築堤は、当時この地を治めていた柳川藩の普請方、田尻惣助・惣馬父子の指揮のもとに進められた。

数々の困難の中で築かれたであろうこの堤防は、その長さから、いつしか「千間土居」と呼ばれるようになった。そして堤防にまつわる物語性も加わり、地域の生活の中にしっかりと根をおろしてきた。

千間土居は３００年以上の間、私たちの生活を守り、当時植えられた楠の木々によってすばらしい環境をつくりだし、今では千間土居公園として人々の憩いの場として親しまれている。

尚、北山地区地域振興会議主催で、毎年10月と3月の２回千間土居公園のボランティア美化活動を行っている。毎回30名前後の参加がある。

< 桜の咲く頃の千間土居　2019 年 4 月 4 日撮影 >

< 楠木の新緑の千間土居　2022 年 4 月 20 日撮影 >

北山の神社仏閣等

左表に、宗教法人名簿に登録されている18法人に加え、共同祭祀等がされている3社を示す。

北山の神社・仏閣

NO	寺・社名	法人登録	祭祀区	宗教系統	包括団体等
1	水天神社	○	山下	神道系	神社司庁
2	八剣神社	○	山下	神道系	神社司庁
3	天満神社	○	山下	神道系	神社司庁
4	玉垂神社	○	男ノ子・鞍懸	神道系	神社司庁
5	天満宮	－	西原	神道系	神社庁
6	天満神社	○	上ノ原	神道系	神社司庁
7	若一王子神社	○	小倉谷・上ノ原	神道系	神社司庁
8	天神さん	－	樋ノ口	神道系	神社司庁
9	錦山神社	○	中川原	神道系	神社司庁
10	生目神社	○	小路	神道系	神社司庁
11	稲荷神社	－	－	神道系	開運寺飛び地境内
12	六所宮	○	谷中	神道系	神社司庁
13	玉垂神社	○	井手ノ口	神道系	神社司庁
14	愛宕神社	○	大倉谷	神道系	神社司庁
15	智願寺	○	山下	仏教系	真宗大谷派
16	浄福寺	○	山下	仏教系	天台宗
17	荘厳院	○	男ノ子	仏教系	真言宗
18	常寂寺	○	小路	仏教系	浄土真宗本願寺派
19	開運寺	○	井手ノ口	仏教系	臨済宗妙心寺派
20	大光寺	○	大倉谷	仏教系	臨済宗妙心寺派
21	天理教 酒井田分教会	○	山下	諸　教	天理教

これら21の神社仏閣は、それぞれに多くのお祭りやお座等の神事が執り行われているが、ここでは、由来までの記載に留め、祭り等の神事の記載は原則行わない。

21の神社仏閣以外にも北山には、多くのお地蔵さま、稲荷神社等が存在し、各地でお祭りや神事が行われている。現在も行われているお祭りを左表に示す。

集落や氏子主催のお祭り

祭り	実施している集落（区）			
地蔵祭り	鞍懸	男ノ子	西原	小倉谷
初午祭り（稲荷神社）	山下			
観音祭り	小路			
恵比寿祭り	山下	中川原		
薬師堂祭り	西原			

第1章　北山地区の神社

1　水天神社（山下）

所在地　大字北山63番地

御祭神　安徳天皇

由緒等　「北山村史」によると、安政6年（1859年）庄屋の古川茂兵衛が、柳川藩から久留米藩瀬ノ下の水天宮へ参詣するのは何かと不便であり、山下町の人々と相謀って水天宮の勧請を思い立つ。万延元年（1860年）3月に社殿が落成し、4月5日に水天宮分霊を勧請して神遷式を行う。平成17年（2005年）道路拡張工事に伴い改築決定　平成19年（2007年）4月24日竣工

山下町のあゆみ

＜ 山下水天宮大祭の様子 ＞

山下の神社仏閣の詳細は、『山下町のあゆみ』参照

2　八剣神社（山下）

所在地　大字北山228番地

素戔嗚尊（スサノオノミコト）

由緒等　八剣神社は、地元では**祇園さん**として親しまれている。「上妻郡名所図会」には、慶長年中創建とあり、万治3年（1630年）山下町より建立願いが出て、寛文元年（1660年）再建されたとあり、山下で一番古いお宮である。

老朽化に伴い、令和2年（2020年）改修工事、同年6月完了

境内社

恵比須神社

御祭神　事代主命（コトシロヌシノミコト）

＜ 八剣神社の神殿・拝殿 ＞

３　天満神社（山下）

所在地　大字北山２３９番地

御祭神　菅原道真公

由緒等　松吉伊与という者太宰府へ申請して勧請（かんじょう）せるという。境内にある石碑に「享保九甲辰年吉祥日　山下住民　助廣又右衛門」とある。このことから、享保９年（１７２４年）頃建てられたものと思われる。元は、助廣家一門の私祭の社である。拝殿の天井には一面に絵師島田蘆翠の竜の墨絵があったが、現在は墨色が薄れてしまって残念ながら見ることができない。

＜ 天満神社の神殿・拝殿 ＞

４　玉垂神社（男ノ子・鞍懸）

所在地　大字北山１８０５番地の１

御祭神　武内宿禰（タケウチノスクネ）

由緒等　天保12年（１８４１年）の創建である。安政元年（１８５４年）４月、神殿が建立されている。大正15年（１９２６年）７月24日、和田（鞍懸）の天満宮が合祀されている。地元では、**高良山（こうらさん）**とよんでいる。鳥居の扁額（へんがく）は、柳川藩の書家椛島桃庵の揮毫になるものである。「夏越（なご）し」のまつりでは、茅（かや）で編んだ輪をくぐる「茅の輪くぐり」風習が今も残っている。

＜ 玉垂神社 ＞

5　天満宮（西原）

所在地　大字白木３７５番地

御祭神　大歳神

菅原道真公

大山咋命（オオヤマグイノミコト）

鎮西八郎為朝公

由緒等　字西原に祭祀されていた

①大年神社（大歳神）

②松尾神社（酒ノ呑(きのどん)さん、大山咋命）

③八郎神社（鎮西八郎為朝公）

字東原に祭祀されていた

④天満宮（菅原道真公）

昭和22年（１９４７年）４社が東原の天満宮に合祀され、⑤ 大年神社となった。

〈昭和 22 年合祀〉

平成24年（２０１２年）の大水害で神社の裏が崩落し土砂に押し出され崩壊した。

平成25年度（２０１３年度）に⑥天満宮として再建・新築され、翌平成26年（２０１４年）２月に創建祝賀式典が挙行され現在に至っている。

〈　天満宮　〉

6　天満神社（上ノ原）

所在地　大字北山２７２４番地の２

御祭神　菅原道真公

由緒等　社の老朽化に伴い、令和５年（２０２３年）12月氏子23名の手により自ら建て替えを行った。

＜　天満神社　＞

7　若一王子神社（小倉谷・上ノ原）

所在地　大字北山２９３０番地の２

御祭神　稚霊尊（ワクムスビノミコト）

由緒等　境内にある天満宮は萬延元年（１８６０年）９月太宰府天満宮より分霊、当初は北山３４７８-2にあった。昭和４年（１９２９年）10月現在の地に遷宮。昭和57年（１９８２年）３月社殿を新しく建立。

＜ 若一王子神社の神殿・拝殿 ＞

＜　天満宮　＞

８　天神さん（樋ノ口）

所在地　大字北山１０４６番地

御祭神　不明

由緒等　田んぼの中のこんもりした繁みの中にある。地元では天神さんとして親しまれている。

石灯篭には、江戸中期の元号『元文』の刻記がある。

＜　繁みの中に天神さん　＞

＜　天神さんのお社　＞

＜　ご神体　＞

＜ 入口の石灯篭としめ縄 ＞

9　錦山神社（中川原）

所在地　大字北山８３４番地

御祭神　加藤清正

境内社　恵比須祠（エビスホコラ）

由緒等　　数年前までは、中川原の各組回しで、「夜渡(ヨド)」宵宮祭を９月24日に行っていた。現在は、旗立てを行い六所宮の神主にご祈祷をお願いしている。

＜　錦山神社　＞

10　生目神社（小路）

所在地　大字北山３７８４番地

御祭神　藤原景清（平景清）公

由緒等　『北山村史』によると、阿久根善右衛門という人の長男が眼病を患い、医薬を用いるも全快しないことから、日向国宮崎郡生目村(宮崎市）の生目八幡宮に参詣して祈念した。帰ってからは飛形山中に７日間立て籠って、生目八幡宮に向かって更に眼病平癒を祈った。見事にその効験があって男の眼病は平癒したのである。善右衛門は願成就のお礼に日向に再び参詣し、分霊を願い請けて帰り石像を彫って祀り、その後お籠り堂を建立した。明治８年（１８７５年）頃の話である。

＜　生目神社　＞

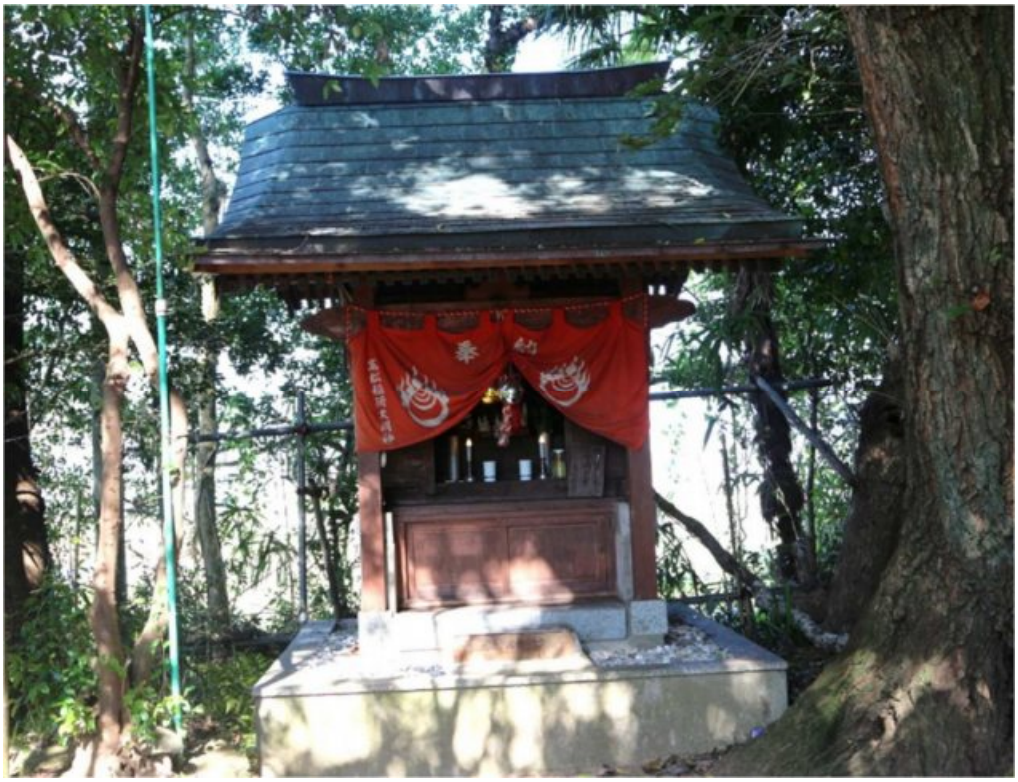
11　稲荷神社

所在地　大字北山５５２６番地

御祭神　不明

由緒等　通称**高松稲荷**と呼ばれ開運寺の飛地境内にあり、開運寺により祭祀が行われている。

祠だけが残っていたが平成２年（１９９０年）近隣の信者によってご神体を新たに安置した。その後参拝用の道路や社殿駐車場を整備した。由緒などは不明であるが、庚申山、稲荷山と呼ばれていたので随分前から信仰されていたものと思われる。矢部川や八女市内を一望できる山頂にあり、谷中から庚申山稲荷山の尾根を通って曲松へと道が続いていた。この山には古代人の住居跡や横穴墓もたくさんあり土器の破片などが出てくる。



〈　高松稲荷神社　〉

12　六所宮（谷中）

所在地　大字北山３８８８番地

御祭神

① 忍穂耳命　（オシホミミノミコ）
② 武磐龍命　（タケイワタツノミコト）
③ 大国主命　（オオクニヌシノミコト）
④ 伊邪那美尊（イザナミノミコト）
⑤ 大山咋命　（オオヤマグイノミコト）
⑥ 軻遇突智命（カグツチノミコト）

合祀祭神

➢ 罔象女命　（ミズハノメノミコト）
　北山字山開に祭祀してあった若宮神社
➢ 崇徳天皇　（ストクテンノウ）
　小路に祭祀されていた琴比羅神社
➢ 菅原道真公　（スガワラミチザネコウ）
　小路に祭祀されていた天満神社

それぞれ、大正13年（１９２４年）２月７日合祀

由緒等

昭和27年（１９５２年）八女郡教育資料によると、上記６柱の祭神を祭ることによって六所神社（宮）という。

創建年代は、不明であるが天文年間（１５３２年～１５５４年）再建(※1)としていることから相当古いものと思われる。六所宮の境内社には他に、稲荷神社・祇園神社もある。

＜ 六所宮拝殿 令和６年正月 ＞

＜　六所宮の山門　＞

＜六所宮 HP＞

六所宮には、上記御祭神以外に共にお祭りしている三社宮（玉垂宮、住吉宮、春日宮）がある。

三社宮は、数百年の間再興できなかったが、六所宮創建後は、御神体は六所宮に相殿として祀られてきた。また三社宮の御座祭は、元は大倉谷、現在は谷中地区の氏子によって六所宮の御座祭と共に継承されている。

昭和52年（1977年）、飛形神宮再興委員会が設置され、広く同志と浄財を募り、飛形山の山頂付近に、『飛形山玉垂神宮』の名称をもって三社宮が再興された。

＜　飛形山玉垂神宮　＞

※1　天文8年（1539年）蒲池美作守再興、永禄12年（1569年）蒲池志摩守鑑廣再興、延宝2年（1674年）十時津守惟直再興の記録がある。

六所宮の肥前型狛犬

【高さ53cm　幅30cm　長さ32cm】

六所宮の拝殿の前に在る一対の狛犬（こまいぬ）は、旧立花町の有形文化財（考古資料）であった。阿蘇溶結凝灰岩で作風は肥前の流れをくみ、年代的には江戸初期頃の作だろうと言われている。何とも言えない品格と愛嬌を感じる。

＜　拝殿前に在る一対の狛犬　＞

13　玉垂神社（井手ノ口）

所在地　大字北山４７８２番地

御祭神　武内宿禰（タケシウチノスクネ）

由緒等　大光寺の境内にあり、井手ノ口が管理している。通称井手ノ口では「こうらさん」と呼んでいる。10月9日には六所宮の神主さんより祝詞奏上をしていただく。そのための大しめ縄の飾り付けや参道社殿の掃除を前日に行う。神主さんが帰られた後は区長さんや隣組長さんが交代で社殿に詰めて参拝者を迎える。

＜　玉垂神社の参道　＞

＜　手洗い鉢 明治 30 年 ＞

正月も、祝詞奏上は無いが同様である。

いつから始まったかということは不明であるが、社殿の横にある手洗い鉢には、明治30年（１８９７年）８月と裏には寄進者の名が刻まれている。

※ 玉垂神社の所在地は大倉谷であるが、祭祀は、井手ノ口が行っている。

＜　玉垂神社　＞

14　愛宕神社（大倉谷）

所在地　大字北山４７８１番地の１の１

御祭神　軻遇突智命　（カグツチノミコト）

由緒等　大光寺の南の頂上にある。開運寺の飛び地境内である。安政５年（１８５８年）10月朔日造立して、大光寺４代傅和尚により祭祀され、飛形山大光寺の鎮護神とされてきた。

石祠に安置される御神体はまぎれもない勝軍地蔵（ショウグンジゾウ）で、防火鎮護とともに牛馬の守護神としての信仰も強く、ここでもすぐ脇に馬頭観世音菩薩が祭祀されていることからも、それをうかがうことができる。

正月前には毎年、大倉谷の有志による愛宕神社周辺の大掃除が行われている。

＜　愛宕神社の石祠　＞

＜ 馬頭観世音菩薩 ＞

<馬喰（バクロウ）さん達が信仰していた牛馬像>

第2章　北山地区の寺院

15　笑月山智願寺（山下）

（ショウゲツサンチガンジ）

所在地　大字北山２４５番地の１

宗派　　真宗大谷派

御本尊　阿弥陀如来

由緒等　寺記録を勘案してみると天正13年（１５８５年）３月、山下城主蒲池鑑廣の３男源十郎が剃髪して教意と 名乗り、北田村上ノ原に悲願院という一宇を建立したとある。また、『寺院沿革誌』では蒲池鎮漣の開基で、当初は天台宗であったともいわれている。

＜　智願寺の鐘楼　＞

＜　智願寺のお庭　＞

開基当初の堂宇の場所についても異説があり、「北山村史」では、「初め樋ノ口にあり、それより茶臼塚に移り、それより現在地に建立す」とある。

宗旨については、第４世教順の代すなわち寛文の頃（１６６２年頃）に今の寺号になる。

悲願院の跡を鵜塚（とうつか）という。

詳細は、34ページ「笑月山智願寺の起こり」参照

＜　智願寺全景　＞

16　山下山浄福寺（山下）

（サンゲサンジョウフクジ）

所在地　大字北山２４０番地

宗派　　天台宗

御本尊　十一面観世音菩薩

筑後三十三箇所観音霊場第30番札所

由緒等　山下のお観音様は天和年間（１６８１年～１６８３年）に天台宗建仁寺の末寺として開基されている。柳川藩主によって山下に商人の町が設置されたのが天和元年（１６８１年）なのでこれと同時期に地域の「守護仏」として郷土の平安と商売繁盛を願って建立されたものと思われる。以来今日まで家運繁盛、無病息災のほか厄除けや厄払いなど霊験あらたかな地元はもちろん、筑後一円に多くの信者がおられ参拝者が絶えない。観音堂横に27体の石仏や弘法大師の像等が祭られいている。

〈 浄福寺観音堂）　〉

〈 浄福寺横の石仏〉

17　荘厳院（男ノ子）

（ショウゴンイン）

所在地　大字北山１８６０-１番地

宗派　　真言宗

御本尊　大日如来

荘厳院は真言宗のお寺であるが、全国の寺社仏閣のご本尊や仏像を多数彫ってこられた仏師で僧侶の西田法雲氏の仏像彫刻所でもある。

詳細は、58ページの男ノ子焼　周辺の名所「荘厳院（真言宗・仏師工房）」参照

18　萬壽山常寂寺（小路）

（マンジュザンジョウジャクジ）
所在地　大字北山３７４４番地
宗派　浄土真宗本願寺派
御本尊　阿弥陀如来

＜ 萬壽山常寂寺 ＞

由緒等　本堂は、柳川の西方寺の末寺として寛永元年（１６２４年）に建立されたが、その後僧のいない状況（無住の庵寺）として現在地に数代続いたと言われる。

三浦旭嶺（天保３年（１８３２年）寂※2）という僧が開基とされている。三池の方から陣笠をかぶり馬に乗ってやって来たことから、当初は馬乗山とも呼ばれていた。今でも寺の手前の場所のことを「庵の下」と呼ばれることがある。

※2　寂とは、僧侶の死を示す。

19　東光山開運寺　（井手ノ口）

（トウコウサンカイウンジ）

所在地　大字北山５４２１番地

宗派　　臨済宗妙心寺派（禅宗の一派）

御本尊　薬師如来

由緒等　もとは東霊山医王寺という。久留米神代村（三井郡北野町）の安国寺末の禅寺であって２代続いた。ところが延宝年中（１６７３年～１８８０年）に、改派の争論があって寺は取りつぶされた。

柳川の天叟寺（臨済宗）第３世萬瑛和尚が、柳川藩主英山公（４代藩主鑑虎）に願って、山門郡築籠村（柳川市対米）にあった開運寺をこの地に移転させた。

英山公は寺領として１町８反を寄進し、庚申堂を祭った。境内にある庚申塔は慶安５年（１６５２年）、年代確認できる庚申塔としては、筑後地区で２番目に古いものである。

詳細は、ホームページ参照

＜　東光山開運寺　＞

＜ 地蔵菩薩納経塔 ＞

＜　庚申塔　＞

＜ 開運寺 HP ＞

20　飛形山大光寺（大倉谷）

（ヒギョウサンダイコウジ）

所在地　大字北山４７８６番地

宗派　　臨済宗妙心寺派

御本尊　十一面千手観世音菩薩

筑後三十三箇所観音霊場第31番札所

由緒等　推古天皇17年（６０９年）、百済国より来朝した日羅（にちら）聖人の開基と言い、御本尊の十一面観世音菩薩その他諸仏もまた日羅の作と言う。宝亀５年（７７４年）落雷のために、御本尊もろともに焼失してしまう。後に、行基（ぎょうき）菩薩が小堂を再建し御本尊も刻んで安置した。

その後、再び火災があって、堂・尊像ともに焼失したが、唯一焼け残った千手のうちの一手を、後に十時氏が新しく千手観音像を造り、その胎内に納めたという。宝永３年（１７０６年）谷中の村人たちが誓願を起こして堂を建立し、観音様を山から現在地に移したと伝えられる。

大光寺は、井上宗規尼という尼住職が98歳まで独りで観音堂を守っていたが高齢で山を下り、現在は無住。同じ宗派で、すぐ近くの開運寺の住職が兼務している。

詳細は、２２ページ「飛形山大光寺」参照

＜　飛形山大光寺　＞

＜　大光寺参道の石仏　＞

第3章　教派教団関係

21　天理教酒井田分教会（山下）

所在地　大字北山67番地の1

（昭和55年（1980年）八女市酒井田より現在地に移転）

由緒等　天理教は、天保9年（1838年）、教祖・中山みきによって始められた。天理教信仰の中心は、親神・天理王命（オヤガミ・テンリオウノミコト）によって人間創造の地点と教えられる聖地「ぢば」で、奈良県天理市に位置する。

天理教の教会は、この「ぢば」の方角を向いて建てられている。

信仰者は教会から「ぢば」に向かって、人々の幸せと救いを親神様に祈る。また、教会を拠点に、「陽気ぐらし」世界の実現を目指し、他者への奉仕を通じて地域社会に役立つ活動を行っている。

山下区の住民は、豪雨災害時等の避難所として酒井田分教会をしばしば利用させていただいている。

＜　天理教酒井田分教会　＞

明治以降の北山

第1章　北山村の誕生

明治９年（１８５０年）10月、山下町と北田村が合併して北山村が誕生した。山下町と北田村を合併し、11集落となす。合併に当たって、村名を山下町は山北村と主張するも、既に生葉（現浮羽）郡に山北村が存在し、北山村となった。

山下町は、『柳川藩史年表』に「天和元年（１６８１年）商家10軒を山下に移し、一新市街地を設け、堀孫助をもって同町の支配とす」と記述されている。

北田という地名は、鎌倉時代、文治２年（１１８６年）５月、源頼朝の御下文案の中に光友と共に記述されている。

１　役場

明治19年（１８８６年）北山村の戸長　松尾三真は濱口亥三郎宅の一室を借り上げて村役場に充てる。

その後、明治25年（１８９２年）上ノ原の中央高台（現公民館の北側）に新築移転する。

更に村役場を樋ノ口に新築移転する。

昭和30年（１９５５年）４村合併により立花町北山支所となる。

＜ 北山村役場（後の立花町北山支所）＞

2　村長

明治22年（1889年）5月15日、初代村長に生形政直が就任以来、昭和30年（1955年）3月立花町に合併されるまでの間、17代の村長が歴任した。詳細は左表のとおり。

北山の歴代村長

代	元　号	就任月日	氏　　名	生年月日
初	明治２２年	5月１５日	生形　政直	弘化４年１月１７日
2	明治２５年	１１月１日	馬場　幾茂	天保８年７月６日
3	明治２７年	5月１０日	堀　　亨	天保１４年5月１０日
4	明治３１年	5月２８日	中島仁一郎	嘉永２年４月１７日
5	明治３１年	8月８日	堀　　亨	天保１４年5月１０日
6	明治３９年	9月１４日	橋爪　健蔵	慶応２年１月３日
7	明治４３年	8月２日	田崎　保	文久元年１２月２９日
8	大正３年	8月２４日	松崎　義夫	慶応３年１２月８日
9	大正７年	9月９日	由布　藤市	元治元年５月４日
10	大正１４年	8月２０日	松崎　義夫	慶応３年１２月８日
11	昭和６年	１２月２６日	田崎　貞吉	明治３４年１月１７日
12	昭和９年	9月１３日	今村　重任	明治１７年３月１４日
13	昭和１０年	1月２８日	松崎　義夫	慶応３年１２月８日
14	昭和１４年	3月２２日	松崎勝三郎	明治３７年１２月１８日
15	昭和１４年	１０月２７日	田中　酉蔵	明治１８年８月７日
16	昭和２２年	4月５日	橋爪　悳	明治２１年９月２８日
17	昭和２３年	１０月６日	田崎　貞吉	明治３４年１月１７日

3　駐在所

明治21年（1888年）4月、林巡査が来村、小倉谷の松﨑惣四郎宅の一室を借りて執務、その後伊良々原の中村理平宅の一室を借りて執務、さらに中川原の堤防上に事務所を新築、そして明治40年（1907年）頃、中川原（岡村医院前）へ移転した。

昭和61年（1986年）樋ノ口へ新築移転した。

更に令和5年（2023年）5月駐在所の老朽化に伴い、樋ノ口の現在地に建て替えられた。

八女警察署 北山駐在所（立花町北山1091-8）

4　郵便局

明治7年（1874年）山下町に郵便局を設置する。明治13年（1880年）白木郵便局設置により山下局（取扱所）が廃止される。

昭和9年（1934年）4月、忠見村井延出身　野上信一が千間土居の官地において開業（集配）する。昭和11年（1936年）に大溝の土居へ移転する。

令和５年（２０２３年）現在の筑後北山郵便局は、樋ノ口（立花町北山１０９０-４）にある。

第2章　産　業

１　蜜　柑

明治35年（１９０２年）頃までは、わずか数本を家屋のまわりに自家用として植えていた。大倉谷の東永三郎が栽培を開始したが、まだ販路のない時代であった。続いて東惣四郎が栽培を開始した。この頃は日露戦争後で経済状態も良くなり、そして朽網幸一が開始、逐次広まり、大正３年（１９１４年）頃になると蜜柑栽培奨励の意味から、小学校児童の優等生に賞品として数本の蜜柑苗木を贈った。

２　梨

明治44年（１９１１年）竹島利助が初めて８畝（約８ａ）の梨園を開設、三吉、長十郎、太白の三種類を植栽したのが始まりである。昭和元年（１９２６年）頃になると栽培が盛んになり、各地の果実品評会において連続一等賞に入賞するなど「北山梨」の名前が広まった。

３　養　蚕

松尾五郎の日記に記されているのが一番古く、明治３年（１８７０年）４月、屋敷に桑の木を植え、明治９年（１８７６年）春、養蚕種を取り入れ飼育したとある。明治12年（１８７９年）十時崇、青木作馬、松尾五郎及び松尾三眞が共同で、資金50円を出資し「養蚕社」を設立、先進地である熊本県山鹿より桑苗を取り寄せ栽培したが、約２年後それぞれ公職に就いたので、事後は婦女子の仕事となった。

北山地区では大正14年（１９２５年）養蚕収入が５万円達成祝賀会が開催された。昭和14年（１９３９年）～15年（１９４０年）頃は養蚕農家が１２０戸あったが、昭和39年（１９６４年）最後の１戸となり、養蚕の灯が消えた。

４　製造業

昭和20年代の製造業は、下表の通りである。

５　電　灯

明治15年（１８８２年）頃までは、士族（武士）の家では丸行燈、平民の家は角行燈を用いて、灯火は油であった。

北山は平坦部では、大正９年（１９２０年）北川内の水力発電によって電灯が灯るようになった。山間部は翌10年４月下旬から点灯した。これによってランプ時代より、大いに手間が省けるようになった

北山の製造業（昭和２０年代）

事業所名	事業種別	従業員数	所在地
不知火缶詰工場	タケノコ缶詰	６０	
松崎缶詰工場	タケノコ缶詰	４０	井手ノ口
甲木缶詰工場	タケノコ缶詰	３０	山下
持丸マオラン工場	製　縄	１０	樋ノ口
松崎マオラン工場	製　縄	６	樋ノ口
松崎製茶工場	製　茶	１０	谷中
松崎製材所	製　材	１０	樋ノ口
大久保製材所	製　材	８	中川原
松崎温石工場	温石製造	５	谷中

第3章 交 通

1 道 路

明治22年（1889年）、上ノ原西端の庄屋坂が急坂で荷馬車の通行が困難なため、東方の上ノ原の中央を貫通して中川原に出る新道を開通させる。明治23年(1890年)頃、白木西原の茶屋（公民館付近）から上ノ原に通じる中央線が開通した。昭和12年（1937年）白木村との境界（白木用水付近）から山鳥坂（現八女農実習場前の坂）を経て中川原に至る新道が完成した。

2 乗合バス

昭和3年（1928年）御大典記念として、福島を起点として中川原、上ノ原を経由して、白木村合ノ原まで定期自動車が運転を始めた。同年山門郡東山村唐尾（瀬高町唐尾）の矢ヶ部伊三郎は、矢部川駅（現瀬高駅）から山下、中川原、上ノ原経由で、白木合ノ原まで定期バスの運行を開始した。

昭和10年（1935年）に屋号を「堀川自動車」と変更した。昭和15年（1940年）11月 福島自動車合名会社を買収し、羽犬塚駅前から立花町中川原間6･4km、東山村小田から白木合ノ原間8･9kmを、経営することになった。

昭和16年（1941年）7月、白木線も買収し、福島から白木村合ノ原間7･9kmの運転を始めた。昭和26年（1951年）1月から白木合ノ原から桐葉間3・91kmの運転も開始した。

その後、バス事業を中心に事業の拡大を進め、1973年には商号を「堀川バス」（本社 福岡県八女市）と改めた。八女市を中心に、福岡県の筑後地方5市1郡で運転されている。

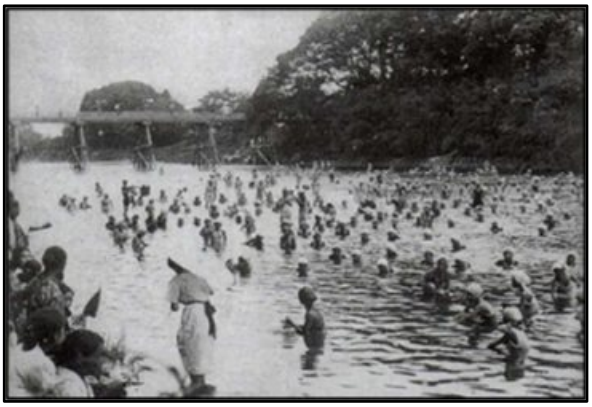
平成20年（2008年）に貸し切りバス事業を売却し、「堀川観光バス」（本社 福岡県粕屋郡宇美町）が、設立されて事業を開始している。

３　橋　梁

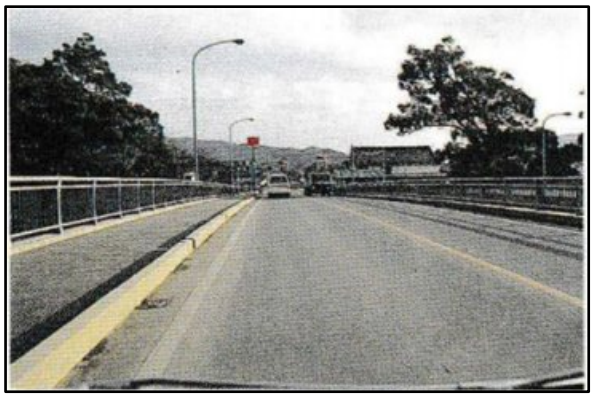
①中川原橋

明治17年（１８８４年）７月、中川原～久留米領柳瀬の渡し場（矢部川）に、北山村の中島仁一郎、木本音五郎による板橋架設願いに許可があり、これが板橋の始まりである。昭和５年（１９３０年）４月５日、初めてコンクリート橋が完成した。

昭和61年（１９８６年）12月２日、中川原橋（県道八女・玉名線）が完成し、開通式を行う。



＜大正末期の中川原橋＞



＜昭和６１年の中川原橋＞

［ 上流より ］

［ 下流より ］

＜令和５年の中川原橋＞

②男ノ子眼鏡橋（単眼橋）

明治27年（１８９４年）頃、男ノ子に架設された。ちょうど日清戦争の時期にあたり、地元では「日清橋」と呼ばれている。橋長８ｍ、橋幅1.9ｍである。現在は、使用されていない。

③堀切眼鏡橋（単眼橋）

明治39年（１９０６年）頃、大倉谷（平）に架設された。橋長9.2ｍである。

④谷中眼鏡橋（単眼橋）

明治34年（１９０１年）頃、谷中中央付近に架設された。橋長2.8ｍ、橋幅1.7ｍである。しかし、豪雨による水害予防のため、撤去された。

＜ 男ノ子眼鏡橋 ＞

＜ 堀切眼鏡橋 ＞

＜ 谷中眼鏡橋 ＞

第４章　教育及び式典

１　北山小学校沿革史

文久元年	１８６１	北田村に北原揚水を招いて私塾「自修館」を開設した。
明治３年	１８７０	山下にあった元御番所の家屋を借り受けて学堂を建てた。
明治７年	１８７４	伊良々原の学堂を寺子屋式小学校として、松尾五次郎を招いて開校した。
明治８年	１８７５	西原に一校を設け、堀亨に指導してもらうが、明治１０年に閉校した。
明治11年	１８７８	「北山小学」として正式に開校した。
明治15年	１８８２	井手ノ口、谷中、大倉谷は遠隔地のため、谷中において授業を開始した。当時不況のため、文部省が補助金を停止したため、一年余で閉校した。
昭和４年	１９２９	校歌制定（作詞　工学士　由布俊一）
昭和16年	１９４１	国民学校と改称する。
昭和20年	１９４５	８月15日終戦により戦時教育より平時教育へ転換する。
昭和29年	１９５４	学校教育法公布により完全給食を実施する。
昭和34年	１９５９	北山小学校を上ノ原に改築移転する。校区変更により、東原・西原を編入する。
平成23年	２０１１	北山小学校と白木小学校が統合し、４月筑南小学校として開校する。

＜　大正時代の北山小学校校舎　＞

＜北山小学校玄関（昭和３４年頃）＞

北山小学校校歌　昭和４年制定

作詞：由布俊一（工学士）

一　朝日ははゆる飛形や
　　月は影すじ矢部川の
　　わが北山の学び舎は
　　たちばなかおる花の里

二　理想の教え身に受けて
　　もゆる学びのこころざし
　　楽しみはげむわざの道
　　あかきまことの旗じるし

三　国と人とのはなたらん
　　おもいは高し身に強し
　　おおしく清くいざや立て
　　われらの上に光あり

※　戦後に歌詞が一部変更されている。（変更分掲載）

２　歴代北山小学校校長

明治７年（１８７４年）、初代校長　松尾吾次郎から白木小学校と合併時の最後の校長　上山和博までは下表のとおり。

３　北山初の敬老会

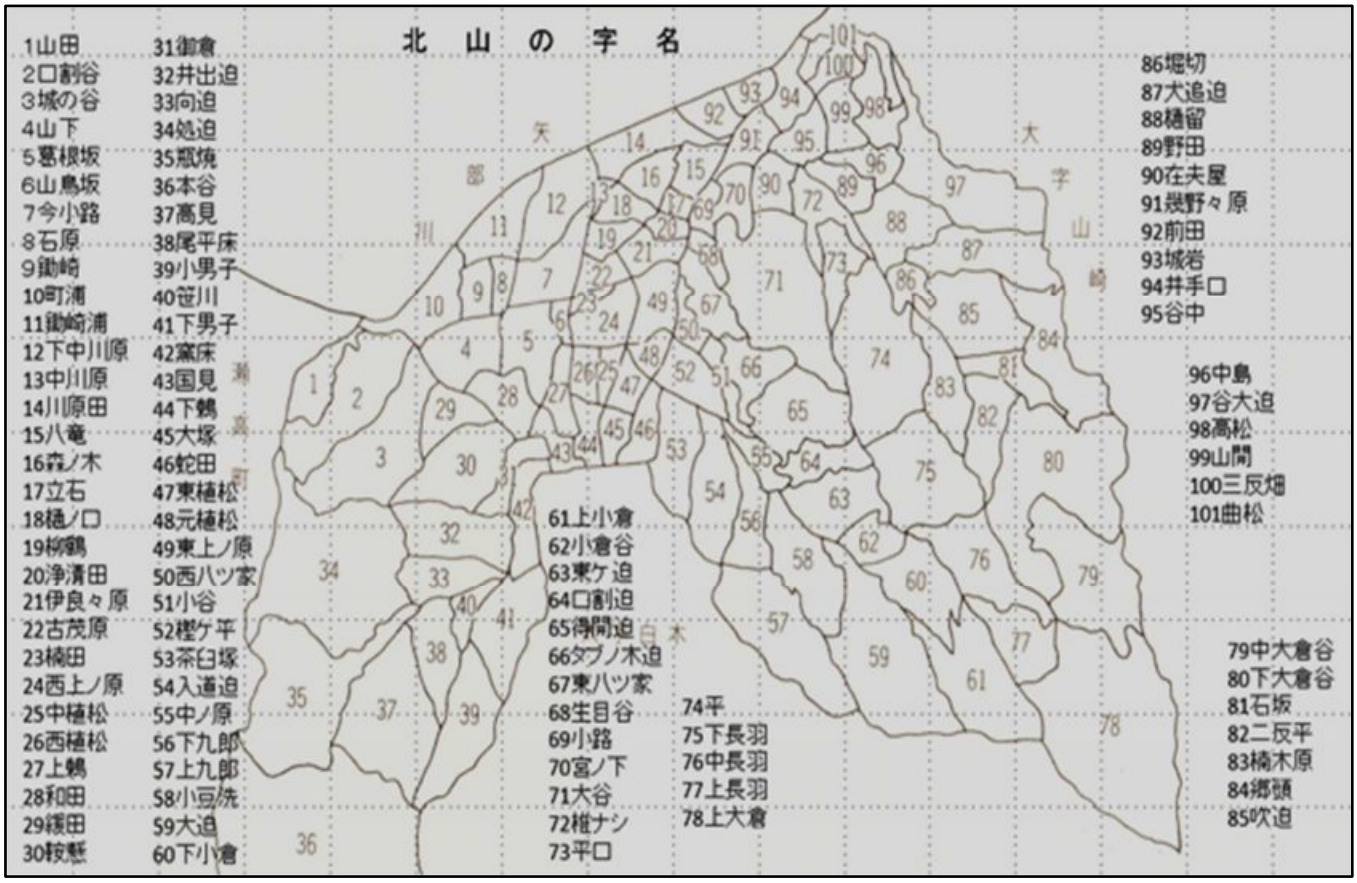
大正８年（１９１９年）２月２日、北山村初の敬老会が開催される。93歳の橋爪剛太以下80歳までの男女32名に対し、村長から銀杯が贈られ、秋季の小学校運動会にも招待されていた。

４　北山初の成人式

昭和24年（１９４９年）１月15日、第一回成人式が挙行された。

北山小学校歴代校長

代	氏名	備考	代	氏名	備考
初代	松尾吾次郎	明治7年	21	堤　貫一	
2	田中　簾平	明治10年	22	近藤　石男	
3	永松　惟志	明治15年	23	田村　猛	
4	生形　逸雄	明治16年	24	原　正人	北　山
5	由布　藤市	明治25年	25	川口　孝義	
6	中島浅次郎	明治26年	26	助広　一郎	北　山
7	加藤増次郎	明治29年	27	黒木　清喬	
8	鹿野　四郎	明治33年	28	樋口幸之輔	
9	三宅　万造	大正6年	29	東谷　徳男	
10	吉村　愼造		30	園田　昭夫	
11	吉田　淳次	昭和2年	31	樋口　修平	
12	宇美　保次		32	西江九州男	
13	下川　辰次		33	朽網　健介	北　山
14	鹿田　光次		34	山口　久幸	矢部村
15	有積　直		35	吉岡　幸夫	
16	西島　勝市		36	山下　講和	
17	谷川　浩		37	上山　和博	最後の校長
18	井上　勝馬				
19	下川　克己	昭和26年			
20	助広　辰三	北　山			



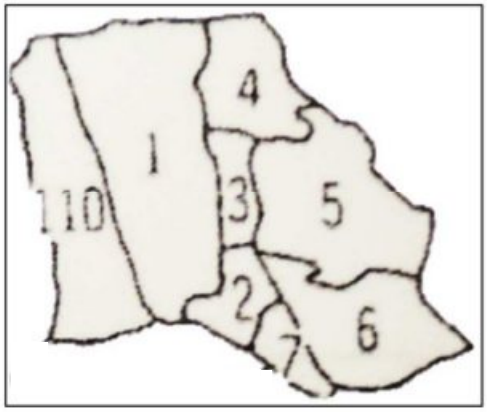
第5章　字名と姓

1　北山と西原の字名

北山の小字名は、上図の通りである。

白木（西原周辺）の小字名は、左図の通りである。

白木（西原周辺）の字名



NO	字名	令和5年
1	西原	西原
2	玉来	
3	杉ノ元	
4	東原	
5	大舞田	
6	一ノ谷	一ノ瀬
7	走落	
110	昨日春	西原

２　北山の姓調べ

『北山村史』雄山士編より

部落名	姓　：　戸　数	総戸数
山　下	古賀：１０、中村：８、助廣：５、松吉：４、宇都宮：３、大塚：３、松尾：３、樋口：４、河野：３、隈本：２、塩塚：２、甲木：２、弥永：２、早見：２、佐藤：２、後藤：２、野林：１、吉岡：１、杉本：１、本村：１、津田：１、藤井：１、家中：１、山田：１、新村：１、古川：１、中島：１、蒲池：１、坂田：１、三栗野：１、永松：１、由布：１、江口：１、安藤：１、東：１，甲斐田：１（甲斐田家は三河村矢原より、樋口家は三河村酒井田より）	７７
鞍　懸	塩塚：１０、森：８、高畠：５、近見：２、西原：１、武藤：１、菊池：１、徳永：１、山口：１、小塩：１、萩尾：１	３２
男ノ子	濱口：１０、杉本：６、戸村：３、原：２、阪田：１、戸島：１、佐々木：１、十時：１、甲斐原：１、橋本：１、松尾：１、谷川：１、久保：１、青木：１	３１
小倉谷	田中：１０、鵜木：７、松﨑：７、石橋：４、船津：２、近見：１、武藤：１、大町：１、橋爪：１、下川：１	３５
上ノ原	近見：６、大城：３、中島：３、内野：２、牛島：２、堀：１、由布：１、池上：１、原：１、佐伯：１、河野：１、武藤：１、鵜木：１	２４
樋ノ口	川島：１２、河島：２、田崎：２、本田：１、菊池：１、中村：１	１９
中川原	中島：２、朽網：２、靏：２、上野：１、松尾：１、武藤：１、稲田：１、大鶴：１、木本：１、金子：１、眞矢部：１、平井：１、北原：１、黒木：１、原：１、津田：１、江崎：１、松﨑：１	２１
小　路	靏：８、河島：３、大鶴：２、鎌田：２、水野：１、武藤：１、壇：１、平井：１、山崎：１、田中：１、三浦：１	２２
井手ノ口	松﨑：７、宮崎：１、坂田：１、谷川：１、谷村：１、高畠：１	１２
谷　中	松﨑：３０、松尾：５、田代：３、山口：２、黒木：２、木本：１、谷川：１、大光寺：１、朽網：１、池上：１、坂田：１、溝上：１、谷村：１、京都：１、生形：１、古川：１、馬場：１、日高：１、岩村：１、持丸：１	４８
大倉谷	松﨑：１１、朽網：６、東：５、村尾：３、立花：１、山口：１，平田：１	２８
	計	３４９

第6章　社会情勢と史跡や民話

1　西南戦争関連

明治10年（1877年）2月、西南戦争のため熊本県の植木や木葉方面へ、官軍や軍夫の往来が激しかったが、9月には沈静化した。

2　紀元二千六百年奉祝行事

昭和15年（1940年）「11月10日～11日、皇居前広場において、紀元二千六百年奉祝行事が執り行われる。両日とも天皇・皇后陛下の行幸があり、5万4000余人の参列が予定されている。各地方も奉祝されたし」とのお達しがあった。

北山村も10日、学校校庭において式典を行い、翌11日午前中、六所宮、小倉谷の若一王子神社、男ノ子の玉垂宮、午後は山下の天満宮において神楽「浦安の舞」の奉納があった。なお、同行事には村長　田中酉蔵が参加した。

浦安の舞奉納者等は次のとおり。

舞い手

谷川サナミ（谷中）、松﨑セツコ（小倉谷）
松﨑ナナエ（谷中）、池上道香（井手ノ口）

歌い手

持丸チョコ（大倉谷）、樋口セツコ（山下）
助廣カスミ（山下）、鵜木ミツヨ（上ノ原）

神楽笛方（山下の4名）

藤井茂雄、佐藤桃人、松尾忠吾、河野寿一

✧ 神楽の浦安の舞は、紀元（皇紀）二千六百年を記念して作られた。

3　北山防空訓練実施

昭和15年（1940年）8月21日、白木村小学校校舎に爆弾が投下され大火災となり、北山警防団に応援要請があり、団員は貨物自動車2台に分乗して現場に駆け付けるも、鎮火により団員一同は北山へ帰還した。午後3時半頃、再び敵機来襲し、北山郵便局に爆弾投下、火災が発生し、地元家庭防空組合員では手に負えず、警防団員の応援を要請、午後4時半頃鎮火し終了、午後6時解散する。

翌22日午前11時頃、北山信用組合屋上に敵機による爆弾が投下され、火災が発生し倉庫に延焼したが警防団員の必死の活動によって、延焼を食い止めた。

4　北山公園

公園は通称八幡山にあって、ここは元、上ノ原、樋ノ口、小路そして小倉谷4ヶ名（集落）の所有であった。当時小学校の運動場が狭かったため、時の校長由布藤市は橋爪健蔵、西原種憲の2職員と協議を重ね、八幡山の広い場所を開拓して、運動場建設を4ヶ名（集落）と交渉した結果、承諾を受け、全児童の保護者も建設を了承、助勢を受けた。

将来は公園として体育・徳育を養成し、その美を達成する目的で、一大岩石に福島町の別所春濤に揮毫を依頼、「済美」と彫刻した。この時期が明治34年（1901年）である。それより毎年この地で運動会を実施した。しかし、運動会資材の運搬に多くの労力を要するため、大正5年（1916年）頃から校庭を拡張し、校庭で実施するようになった。

＜ 北山公園石碑 ＞

＜ 北山公園広場 ＞

昭和２年（１９２７年）より小学校卒業記念に、桜木の植樹や地元小路によるツツジの植栽もあり、春季には多くの来訪者があった。

旧八女市を含む近隣小学校の、遠足のメッカでもあった。

（由布藤市氏直話）

５　北山の石像遺物

①　山下の四里石

山下の鋤崎（スギザキ）の入り口（田んぼのあぜ道）に四里石がある。高さ１２４ｃｍ、幅２９ｃｍ、厚さ２３ｃｍの石柱である。

一里石、又は四里石と呼ばれているが、これは柳川城札ノ辻よりの里程表示石で、筑後地方では慶長６年（１６０１年）筑後全域を領有した田中吉政の命によって作られたものともいう説がある。

この山下の四里石は、柳川城札ノ辻を基点として１里（３９２７ｍ）ごとに建てたものである。

立花町では山下の四里石だけが残っている貴重なものである。

＜　四里石　＞

これ以外の北山の石像遺物には、次のものがある。

②　六所宮の狛犬

７８ページ「六所宮の肥前型狛犬」参照

③　大光寺の将軍地蔵

８０ページ「愛宕神社」参照

④　開運寺の庚申塔

８４ページ「東光山開運寺」参照

6　北山の民話

①　今でも坂

北山の小路から小学校に通ずる坂道を「今でも坂」という。当時は道幅も狭く、両側は鬱蒼と木が茂り暗いほどであった。ある日のこと、通りかかった旅人が「ここは怪物が出ると聞くが、今でも出るか？」といい終わらんとすると「今でも出るぞ」と言って怪物が現れた。以来「今でも坂」と言うようになった。

＜ 現在の今出坂 ＞

②　御前の水

上ノ原の西部に、庄屋坂という旧道がある。某庄屋の屋敷跡の西側に、清き井戸水があった。藩主の飲み水に供したという。よってこれを「御前の水」と言われている。

これ以外にも北山には民話として、次のものがある。

③　生目八幡さん

75ページ「生目神社」参照

④　手継淵（山下）

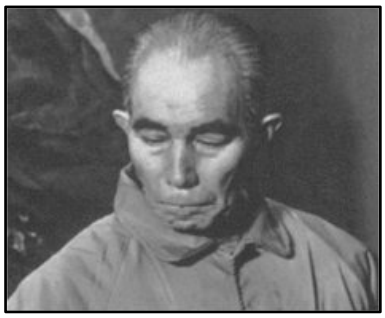
25ページ「火の玉伝説」参照

第7章　北山ゆかりの人々

１　画家　田崎廣助（本名：田崎廣次）

明治31年（１８９８年）北山上ノ原の父田崎作太郎、母モトの長男として生まれ、母の実家は、立花藩漢学者の家柄で助廣と名乗っていた。その助廣をひっくりかえして廣助にしたのが、雅号の由来とされている。

八女中学校（現八女高校）から福岡師範学校第二部を卒業し、教職員を経て、京都の関西美術院で学ぶ。昭和７年（１９３２年）渡欧パリに留学、帰国後画家活動、昭和42年（１９６７年）日本芸術院会員昭和50年（１９７５年）文化勲章受章、



＜　田崎廣助　＞

田崎廣助美術館 HP

翌年、立花町名誉町民（現八女市名誉市民）の称号を贈られる。昭和59年（１９８４年）86歳で死去。

平成28年（２０１６年）八女市役所立花支所横に「田崎廣助美術館」が開設される。

＜ 田崎廣助　「阿蘇山」1976 年作 ＞

２　俳優　東勇路（本名 中島勇）

明治35年（１９０２年）３月15日～没年不詳

日活俳優として名声を博した東勇路は、明治35年（１９０２年）、北山村山下の中島勝次の次男として生まれ、八女中学校（現八女高校）を卒業、大正12年（１９２３年）、小笠原プロダクション設立に参加した。大正14年（１９２５年）に公開された「水兵の母」に主演するなど多数の映画に出演した。

＜ 東勇路 ＞

３　武道家　助廣彌一郎

天保10年（１８３９年）～大正13年（１９２４年）８月、山下と中川原の境に、明治45年（１９１２年）、門弟によって石碑が建立されている。碑文には「柔道師範 助廣彌一郎 信高」の名前が彫り込んである。助廣彌一郎は旧柳川藩士助廣伯盈（はくえい）の３男で柔道扱心流を地元山下近隣において、20年間にわたり指導にあたり、武道発展に貢献されたようである。

＜ 助廣彌一郎の石碑 ＞

４　武道家　青木楽山（あおきらくざん）

文政２年（１８１９年）～明治17年（１８８４年）

本名　青木助左衛門は、濱口大東の長男として生まれ、柳川袋小路の師範　渡邊又右エ門の道場に入門、日置流の弓道、影流の居合道を習得し、帰郷し道場を開設、多数の門弟を抱えていた。

明治17年（１８８４年）１月22日享年66で死去明治20年門弟たちによって、男ノ子に「青木楽山先生」の石碑が建立された。

＜ 青木楽山の石碑 ＞

以上、明治以降、概ね立花町が誕生する前までの北山について記載した。

立花町が誕生した昭和30年（１９５５年）以降～八女市誕生前後までの主な出来事については、次頁に**「立花町誕生後の主な出来事」**として示す。

なお、１０７ページからの**「北山の歴史年表」**は、縄文時代から令和までの、北山に関する主な出来事を示している。

第8章　立花町誕生後の主な出来事

昭和30年	1955	4月1日　立花町が誕生する。（光友村･北山村･白木村･辺春村を合併　*総人口1万8055人）
昭和34年	1959	北山小学校を上ノ原に改築移転する。校区変更により、東原・西原を編入する。
昭和38年	1963	4月、有線放送電話施設が完成し、放送を開始する。
昭和45年	1970	八女筑後広域市町村圏事務組合が発足する。
昭和47年	1972	5月、北山児童公園(中川原)が完成し、開園式を行う。
昭和53年	1978	4月、町立第3保育所(北山）が竣工する。
昭和61年	1986	千間土居公園整備事業完成する。※ゲートボール場、ソフトボール場、キャンプ場、遊園地、冒険の森、自然の森、桜の森
昭和61年	1986	12月、中川原橋が完成する。
昭和62年	1987	西原区を北山へ編入する。
平成2年	1990	3月、男ノ子焼復元のための施設「男ノ子焼の里」が完成する。
平成22年	2010	2月1日黒木町・立花町・矢部村・星野村と合併し新八女市が誕生する。
平成23年	2011	北山小学校と白木小学校が統合し、4月筑南小学校が開校する。

北山の歴史年表

NO	時代	年号	西暦	事項	
1	縄文時代			上ノ原遺跡　白木西原遺跡　北山小学校遺跡　北山今小路遺跡①	
2			前300	稲作が伝わる。	
3	弥生時代			農耕生活の始まり。	
4			BC		
5			AD	小倉谷遺跡　山下遺跡　北山今小路遺跡②	
6				曲松遺跡　北山八竜遺跡①　幾野乃原遺跡等	
7	古墳時代			大和朝廷の全国統一が進む。	筑紫国
8		四世紀中ごろ		倭・百済、新羅と戦う。	⇐
9				八女県、八女津媛、水沼県の名が見える（日本書紀）	
10		－	527	筑紫君磐井の乱　岩戸山古墳（旧八女市）　北山八竜遺跡②	
11				乗馬古墳（旧八女市）　白木西原古墳群　茶臼塚古墳	

12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
			飛鳥時代			奈良時代	平安時代		鎌倉時代						
－			大化元年	7世紀末	大宝1年	和銅3年	延暦13年		文治1年	文治2年	建久3年	建久5年	建永2年	建暦2年	文永11年
562			645		701	710	794	－	1185	1186	1192	1194	1207	1212	1274
加羅（任那）、新羅にほろぼされる。	稲荷山横穴群　小倉谷横穴群　鬼隈横穴群　北山今小路遺跡③	大塚古墳	大化の改新	筑紫国が、筑前国と筑後国に分かれる。	大宝律令の制定	平城京（奈良）遷都	平安京（京都）遷都		鎌倉幕府事実上成立	源頼朝、上妻郡に藤原家宗を地頭職とする時、光友、北田の地名あり。	源頼朝、征夷大将軍となる。	源頼朝政所下文案に光友、北田とあり。	上妻次郎大夫家宗、光友・北田などを支配すべきことを源実朝から命ぜられる。	上妻家宗、北田・白木等の地頭職となる。	文永の役（元寇）
筑紫国	⇦			筑後国						北田					

28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43
		室町時代													江戸時代
弘安4年	建武1年	建武3年	暦応元年	正平6年	明徳3年	応仁元年	永正年中	永正年間	天正3年	天正7年	天正15年	天正16年	天正16年	慶長5年	慶長6年
1281	1334	1336	1338	1351	1392	1467	1504～21	－	1575	1579	1587	1588	1588	1600	1601
弘安の役（元寇）	建武の新政―後醍醐天皇	足利尊氏が建武式目を制定	足利尊氏、征夷大将軍となる。	征西将軍懐良親王、五條氏・菊池氏らと共に筑後国府に入る。	南北朝合一	応仁の乱	三潴郡蒲池城主蒲池治久、2男親広に山下に館所を構えさせる。上蒲池氏の始まり。	親広の子蒲池鑑廣（あきひろ）、山下城を築城する。	田尻鑑種、龍造寺隆信の命をうけ、蒲池鑑廣を山下城に攻める。辺春、兼松へも進攻する。	龍造寺隆信、水田（筑後市）に陣し、2万の兵をもって矢原、福島などより山下城を攻める。	龍造寺政家、山下城を攻め、城下を焼き払う。	筑紫広門、山下城に居住して福島城を築く。　1万8000石	立花宗茂、柳川城に入る。　13万石	関ヶ原の戦い	田中吉政、関ヶ原の戦いの功により筑後一国の国主に封せられ、柳川に居城する。33万1400石

44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59
慶長6年	慶長8年	慶長10年	元和6年	寛永元年	慶安5年	延宝8年	天和元年	天和3年	元禄8年	宝永3年	宝永7年	享保9年	享保16年	享保18年	元文4年
1601	1603	1605	1620	1624	1652	1680	1681	1683	1695	1706	1710	1724	1731	1733	1739
田中吉政、山下城を廃する。	徳川家康、征夷大将軍となる。	山下に智願寺を建立する。	立花宗茂、再び柳川城主となる。　12万石	北田に常寂寺を建立する。	開運寺石碑の銘に「壬辰三月吉日鎮筑之後州上妻郡高塚村天神上□」とある。	北田村に開運寺を建立する。　この地は医王寺の跡という。	商家十数軒を上妻郡山下に移して、堀孫助に同町を支配させる。	山下に浄福寺を創建する。　観世音菩薩碑に元禄3年の年号が見える。	田尻惣助、千間土居を築く。　後年に惣馬により刎等により補修強化された。	飛形山頂の大光寺を谷中に移す。（筑後30番札所）	北田村大光寺に「納石経法華八軸」の碑を建てる。	山下天満宮の石碑に「天満大自在天神」山下町住人助広又右衛門の銘がある。	山下町童子講中佛果為菩提奉建立閻魔像　辛亥年一二月吉日とある。	開運寺地蔵菩薩納経塔を建てる。	曲松の地蔵尊を建てる。　（願主）小倉谷盲人
							山下町								

60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75
							明治								
宝暦9年	宝暦13年	天明4年	文政5年	天保13年	万永元年	慶長年間	明治2年	明治4年	明治4年	明治7年	明治8年			明治9年	明治9年
1759	1763	1784	1822	1842	1860	－	1869	1871	1871	1874	1875			1876	1876
開運寺の喚鐘に「柳川城領上妻郡喜多田村谷東光山開運寺」の銘がある。	6月、宝聚寺嶺松が飛形山宝殿を再興する。　昭和46年12月23日現在地に遷座する。	山下町　市左衛門孝子として柳川藩主から賞せられる。	山下町の釋大統が日田の咸宜園に入門する。	北山　若一王子神社に三十六歌仙の額絵馬が奉納される。　15枚残る。	山下町手継淵に水天宮を勧請する。	山下の祇園社を勧請する。	版籍奉還により藩主を藩知事とする。立花鑑寛、柳河藩知事となる。	廃藩置県により旧柳川藩領を柳川県とする。	第1次府県統合により、久留米県、三池県、柳川県が統一され、三潴県となる。	北田村に寺小屋式小学校を設立する。	六月区割を改正し、区長に池辺参郎、小区を合併して戸長を置く。	白木・本山　橋本治平　山下町・北田　中村常吉　山崎・兼松　十時新吉郎、	谷川・原島・南田形　永井与三太　下辺春・上辺春　原田右左次	第2次府県統合により三潴県は、福岡県へ編入される。	北田村と山下町が合併して北山村となる。
								柳川県	三潴県					福岡県	北山村

91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76
	大正														
大正3年	大正2年	明治45年	明治41年	明治39年	明治37年	明治35年	明治29年	明治27年	明治24年	明治22年	明治20年	明治12年	明治11年	明治11年	明治11年
1914	1913	1912	1908	1906	1904	1902	1896	1894	1891	1889	1887	1879	1878	1878	1878
第1次世界大戦	福島～日吉町（久留米）間に電車が開通する。	山下に柔道師範助広弥一郎の碑を建立する。	県立八女中学校（現八女高校）を創立する。	大倉谷の堀切眼鏡橋はこの頃架橋か？	日露戦争	郡立福島農学校現八女農業高校を創立する。	上妻、下妻両郡を廃し、新たに生葉郡の星野村を加えて八女郡と称する。	男ノ子の眼鏡橋架橋はこの頃架橋か？／日清戦争	九州鉄道（鹿児島本線）久留米～木ノ葉間が開通し、羽犬塚駅開設する。	市町村制施行により初代村長就任する。　北山村村長　生形政直　372戸　2012人（明治20年）	男ノ子に青木楽山先生の碑を建てる。　（日置流弓術、景流居合）	六所宮の格天井絵馬（太閤記）卯九月吉日麗琴画、36歌仙は35枚現存する。	玉垂神社に額絵馬を、倉掛名徳太郎御願成就として奉納する。	「北山小学」として正式に開校する。	郡区町村編成法の施行により上妻郡が発足する。
							八女郡								上妻郡

107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92
										昭和					
昭和30年	昭和30年	昭和29年	昭和29年	昭和28年	昭和26年	昭和23年	昭和23年	昭和22年	昭和20年	昭和16年	大正15年	大正14年	大正14年	大正10年	大正9年
1955	1955	1954	1954	1953	1951	1948	1948	1947	1945	1941	1925	1925	1925	1921	1920
岩戸山古墳が国の史跡に指定される。	4月1日　立花町が誕生する。（光友村・北山村・白木村・辺春村を合併　＊総人口1万8055人）	旧八女市市制施行、市庁舎完成する。	各小学校において完全給食を実施する。	台風15号により福岡県の南部に大豪雨、矢部川、筑後川その他に大氾濫し空前の被害が出る。6月26日　山下、中川原も泥海、中川原橋も流失する。	白木、北山中学校を廃校し、白木、北山村組合立筑南中学校を創設する。	新制高等学校が発足する。　男女共学の実施　県立黒木、福島、八女農業、八女、八女工業高等学校、私立八女津女子高校	各村に農業協同組合を設立する。	六三三制の実施により、新制中学校が発足して、当分の間各小学校に設置される。	日本の敗戦　／　国鉄矢部線（羽犬塚～黒木間）が開通する。	太平洋戦争始まる。　／　村内各尋常高等小学校を国民学校と改称する。	八女郡役所を廃止し、地方事務所を設置する。	養蚕業の好景気時代で北山村で五万円祝をする。　北山村養蚕農家　150戸	私立八女技芸女学校を八女津実習女学校（現八女学院高等学校）と改称する。	八女郡立技芸女学校を廃止して福岡県立八女高等女学校（現福島高校）を設ける。	県立八女工業学校（現八女工業高校）が羽犬塚町（現筑後市）に開校する。
	立花町誕生	八女市誕生													

123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108
昭和59年	昭和59年	昭和53年	昭和52年	昭和50年	昭和49年	昭和47年	昭和47年	昭和45年	昭和40年	昭和39年	昭和38年	昭和35年	昭和34年	昭和33年	昭和32年
1984	1984	1978	1977	1975	1974	1972	1972	1970	1965	1964	1963	1960	1959	1958	1957
2月、「北山児童公園」を「千間土居公園」と改称する。	1月、曲松遺跡（北山）の発掘調査を行う。	4月、町立第3保育所（北山）　が新築竣工する。	9月、北山小学校のプールが竣工する。10月2日、北山小学校が創立百周年記念式典を行う。	飛形山頂で桜等の幼木3000本を植え、植樹祭を行う。　4月、飛形山頂を公園化し、慰霊碑を建立する。	八女西部清掃工場が完成する。／筑後中部清掃工場が完成する。	八女民生病院を八女公立病院と改称する。	5月、北山児童公園（中川原）が完成し、開園式を行う。	八女筑後広域市町村圏事務組合発足する。／旧八女市庁舎完成する。	4月、立花町の有線放送から公社電話線に接続する。	立花町での「まゆ」生産農家は1戸で、この年限リで本町の養蚕農家はなくなる。	4月、有線放送電話施設が完成し、放送を開始する。	八女民生病院組合が設立（44床）される。	北山小学校を上ノ原に改築移転する。校区変更により、東原・西原を編入する。	11月、久留米市日吉町～福島（土橋）の電車が撤廃され、バス運行となる。	10月、町立第3保育所を北山に開設する。

139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124
									平成						
平成19年	平成18年	平成13年	平成10年	平成6年	平成5年	平成4年	平成2年	平成2年	平成元年	昭和62年	昭和61年	昭和61年	昭和61年	昭和60年	昭和60年
2007	2006	2001	1998	1994	1993	1992	1990	1990	1989	1987	1986	1986	1986	1985	1985
12月3日八女市・黒木町・立花町・矢部村・星野村で構成する「八女地区1市2町2村合併協議会」第1回会合を行う。	10月1日、八女市と八女郡上陽町が合併し、新「八女市」が誕生する。	旧八女市公式ホームページを開設する。	第1回雛の里八女ぼんぼりまつり開催／べんがら村オープンする。	旧八女市のシンボルマーク、イメージキャラクター、イメージソングを決定する。	旧八女市上水道給水開始（福島校区とその周辺地域）する。	西短大付高が全国高校野球選手権大会（甲子園）で優勝する。	3月、筑南中学校のプールが竣工する。	3月、男ノ子焼復元のための施設「男ノ子焼の里」が完成する。	11月、小倉谷横穴墓群の発掘調査が行われる	西原区を北山へ編入する。	八女伝統工芸館が開館する。	12月、中川原橋が完成する。	「千間土居公園」の整備事業が完成する。※ゲートボール場、ソフトボール場、キャンプ場、遊園地、冒険の森、自然の森、桜の森	国鉄矢部線が廃止される。	10月、町内4農協が合併し、福岡立花農業協同組合として発足する。
	八女市														

155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140
					令和										
		令和5年	令和2年	令和2年	令和元年	平成30年	平成29年	平成28年	平成27年	平成26年	平成25年	平成24年	平成23年	平成22年	平成21年
		2023	2020	2020	2019	2018	2017	2016	2015	2014	2013	2012	2011	2010	2009
		筑南小・中学校のあり方を考える会が要望書提出する。（筑南校区）　筑南中学校のあり方検討委員会が発足する。（八女市教育委員会）	道の駅たちばな「お食事処招竹梅」がオープンする。／コミュニティ通貨「まちのコイン（ロマン）」の使用を開始する。	新型コロナウイルス感染症総合支援対策事業を実施する。	筑南小・中学校のあり方を考える会が発足する。	「野球部員演劇の舞台に立つ！」の映画が公開される。／八女市健康ポイント事業を開始する。／主要地方道八女香春線「合瀬耳納トンネル」が完成する。	市役所内に移住・定住相談コーナーを新設する。	田崎廣助美術館がオープンする。／矢部地区観光物産交流施設「杣のさと」がオープンする。／大淵体験交流施設「げんき館おおぶち」がオープンする。	くつろぎの森グリーンピア八女がリニューアルオープンする。／八女市岩戸山歴史文化交流館「いわいの郷（さと）」がオープンする。	八女市ドクターヘリポート（市内4カ所・照明付）が完成する。／八女市子育て支援総合施設「やめっこ未来館」がオープンする。	市内すべての小・中学校に空調設備を設置する。／八女東部スポーツ公園がオープンする。	九州北部豪雨による大災害が起きる。／FM八女の開局と緊急告知FMラジオの全世帯配布が始まる。	北山小学校と白木小学校が統合し、4月筑南小学校開校する。／11月道の駅たちばな直売所が日本一になる。	2月1日、新「八女市」と黒木町・立花町・矢部村・星野村が合併し、現「八女市」が誕生する。	4月小中一貫教育校上陽北汭（ほくぜい）学園が開校する。現在、「義務教育学校」と改称
														八女市	

主な参考文献・資料

一、『立花町史』上巻・下巻　１９９６年３月（立花町）
一、『立花町史年表』平成３年２月16日（立花町）
一、『角川日本地名大辞典』４０福岡県（角川書店）
一、『続郷土は語る』１９７６年（立花町教育委員会）
一、『郷土は語る５　立花町文化財めぐり』１９８３年（立花町教育委員会）
一、『立花町小字地名の由来と意味』平成23年３月（長瀬武夫著）
一、『せんげんどい』平成７年８月14日（立花町）
一、『立花町の文化財』平成元年３月（立花町教育委員会）
一、『飛形山縁起』
一、『智願寺の縁起』
一、『山下町のあゆみ』令和３年12月（中村富治著）
一、『石匠の技　福岡県南地方の石橋』平成10年11月（馬場紘一著）
一、『上妻郡名所旧跡記録』「名所図会」
一、『谷川組御用日記』第１集～第４集（立花町教育委員会）
一、『春華秋実』１９９０年３月（杉森彬著）
一、『筑後川河川事務所ホームページ』
一、『八女市役所ホームページ』
一、『北山村史』雄山士編
一、『立花町発掘調査報告書』（立花町教育委員会）

おわりに

この「北山のあゆみ」の編集は、平成31年度八女市地域づくり提案事業による『山下城址の案内板・説明板等の設置』に端を発する。

その後「北山よかとこさるこう会」主催、北山地区地域振興会議後援の『北山よかとこウオーキング』や『北山よかとこ講演会』によって、北山地区の歴史的文化遺産が再発見・発掘され発信された。

これらの先人が遺した歴史的文化遺産を、今ここで素人だが私たちの手でまとめ後世に伝えようという願いから、編集が始まった。歴史的文化遺産の再調査、執筆項の選択、執筆者の分担、資料や写真の収集等に時間を要したが、編集委員一人ひとりの熱い努力により願いが達成され「北山のあゆみ」が誕生した。

私たち手作りの「北山のあゆみ」が、私たちの郷土北山への思いや見方・考え方の一助になればと願う。

この「北山のあゆみ」の編集に当たっては、北山地区地域振興会議の皆様方、その他多くの方々にいろいろとご指導・ご支援を賜り有難うございました。

特に監修を快く引き受け、丁寧にご指導いただいた佐々木四十臣氏には深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

令和６年２月

編集委員長　大　石　官

Ⓗ	Ⓕ	Ⓖ	Ⓔ	Ⓓ
	Ⓒ	Ⓐ	Ⓑ	

北山地区郷土史編纂事業

「北山のあゆみ」編集委員会

編集委員長	大石　官	Ⓐ
編集委員	池上寛道	Ⓑ
編集委員	鵜木昭義	Ⓒ
編集委員	谷川雅啓	Ⓓ
編集委員	三浦　洋	Ⓔ
編集委員	持丸末喜	Ⓕ
事務局長	甲斐田照明	Ⓖ
事務局	藤井康弘	Ⓗ

北山のあゆみ

令和６年２月発刊

編集「北山のあゆみ」編集委員会

発刊　北山地区地域振興会議

印刷　ラクスル株式会社

（令和５年度　八女市地域づくり提案事業）